家庭雜誌

第貳拾七號

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

◎此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル様ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所

米國貿易商會

橫濱廿八番

神戸十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳菓

平民叢書

平民叢書第一卷 **十九世紀之大勢** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第二卷 **世界經濟上之變動** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第三卷 **國家と政府** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第四卷 **教育と遺傳** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第五卷 **文明之弊及其救治** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第六卷 **現時之社會主義** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第七卷 **經濟と道德** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第八卷 **歷史攻究法** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書第九卷 **哲學變遷史** 定價拾貳錢 郵稅貳錢

平民叢書號外 **銀貨之過去現在未來** 定價拾錢 郵稅貳錢

深井英五著

平民叢書號外 責任內閣

定價拾錢 郵稅二錢

目錄 ㊀第一、明治の新政 ㊁第二、議會と政府の衝突 ㊂第三、專制政治と立憲政治 ㊃第四、爲政者の責任 ㊄第五、立憲君主と輔弼大臣 ㊅第六、議院と內閣(上) ㊆第七、議院と內閣(下) ㊇第八、國民的政府

金玉の憲法ありて立憲政治の美果未だ收められず、議會と政府徒らに抗爭し、立法、行政の兩部常に扞格して、動もすれば國務の曠廢を致さんとするものは抑も何故ぞ。他なし、責任內閣の制、未だ固く定まらざるを以て也。

天皇不可侵の義憲法に昭明せられて尚ほ聖明を煩はし奉ることあるを免れず、動もすれば神聖の天皇をして政爭の孤柱たらしめ奉らんとするの惧あるものは抑も何故ぞ。他なし、輔弼の大臣未だ國民に對して責任を負ふことを肯ぜざるを以て也。

此書政法學の原理に據り、憲政史の事實に基き、責任內閣の意義を論明すること嚴正にして又た適切。以て國家憲制の學理的解說たる可く、以て時局の必要に應ずる實際的指南車たる可し。立憲の美果を擧げ、皇室の尊榮を發揚せんとするの志ある諸君子請ふ此書に對して一片の同情を惜しむ勿れ。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

民友社出版書概目錄

書名	定價	郵税
國民叢書 人物管見	拾五錢	二錢
國民叢書 青年と教育	拾五錢	四錢
國民叢書 靜思餘錄	拾六錢	四錢
國民叢書 文學斷片	拾五錢	四錢
吉田松陰	五拾錢	八錢
グラッドストン	貳拾錢	四錢
武雷土	拾五錢	四錢
格武電	貳拾錢	四錢
格朗芝	貳拾錢	四錢
伊太利建國三傑	貳拾錢	四錢
幕府衰亡論	卅五錢	六錢
新日本史 上	四拾錢	六錢
新日本史 中	三拾錢	六錢
近世歐米歷史之片影	貳拾錢	四錢

書名	定價	郵税
第二之維新	拾錢	貳錢
國民的大問題	貳拾錢	四錢
政黨論	廿五錢	四錢
英米佛 比較憲法論	貳拾錢	四錢
排偽哲學論	拾貳錢	貳錢
新日本之青年	貳拾錢	四錢
誕生日	拾五錢	貳錢
一語千金	五錢	貳錢
第一國民小說	拾五錢	四錢
第二國民小說	拾五錢	六錢
第三國民小說	拾五錢	四錢
歸省	拾五錢	四錢
懷舊	貳拾錢	四錢
最暗黑之東京	拾参錢	四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

◎國民新聞の本領 （不羈獨立）

不羈獨立の氣魄を以て、隱然一敵國たるものあらば、國民新聞は、確かに其の一に居らむ。藩閥割據に對する國民的精神。有司專制に對する責任內閣。自屈的外交に對する自主的外交。是れ國民新聞が百厄千難を抵當として、熱心主張する所ろなり。若しそれ社會の公德を扶植し、立憲國たる善風美俗を長養し、國民の精神を陶冶し、國家の元氣を積蓄し、以て百年の大計を定めんとするが如き、是れ國民新聞の宿志也。

◎國民新聞の眞價 （新聞中の新聞）

國民新聞の眞價は新聞中の新聞たるにあり。其の着眼、恒に他に一歩を先んぜり。總て新奇なる問題は、國民新聞の爲めに看取せられ、論評せられ、說明せられ、而して漸々世間の注意を博するに到るなり。約言すれば國民新聞は、新聞中の急先鋒なり。

◎國民新聞の本色 （多角的）

多角的を以て、新聞の本色とせば、國民新聞確かに其の一に居らむ。國民新聞は、政治問題に就て、特別の手眼を有するに係らす。清新健全なる文學。世態人情に關する同情多くして、深切なる社會的觀察。社會の血管を縱橫する思想の潮流。殖產興業、通商貿易、その他一切經濟の大勢。及び社會人事の森羅萬象、悉く擧けて漏らす所なし。

◎國民新聞の紙面 （利益と快樂と併せ兼ぬ）

重大なる問題に際しては、滔々汨々數千言の大論文を草す。日々の問題に關しては、三四乃至五六の小品論評あり。政治上の主流、大勢を諷刺するには、精嚴奇警なる雜錄あり。海外時事。文學時事。社會問題。演說筆記。行樂案內。演劇批評。新刊書批評。時事短評。流行案內。經濟事情。その他通信は朝鮮琉球より內地の各所に及び。之に加ふるに雄奇精妙なる插畫あり。更らに日曜附錄あり、社員諸氏獨力結構の文學的、社會的文學を掲載す。一たび之を手にすれば、再た措く能はさらしむ。變化あり波瀾あり、人をして快樂と利益と併せ兼れしむ。

定價

	定價	地方郵稅
一枚	一錢五厘	五厘
一ケ月	三十五錢	十三錢
三ケ月	壹圓	三十九錢
六ケ月	壹圓九十五錢	七十八錢
一ケ年	三圓九十錢	一圓五十六錢

廣告料

一行の代價は左の如し 但五號活字二十二字詰

一回	十三錢
二回以上	十二錢
五回以上	十錢

發行所 東京市日吉町 國民新聞社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せず、見本は郵券五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵券代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割増

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價

		郵税	地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘	
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢	
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢	

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

發行兼印刷人 垣田純朗

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

印刷所 東京市京橋區西紺屋町 株式會社秀英舍

明治二十七年四月十日發行

家庭雜誌第貳拾七號

目錄



明治二十七年四月十日發行

家庭雜誌第貳拾七號

目錄



家庭雜誌第貳拾七號
（明治二十七年四月十日發兌）

社說

看花の好時節

『花より團子』と申す俚諺あれども、世の中は團子のみにて、暮さるゝものにあらず。時としては月も眺めねばならぬなり、時としては花も看ねばならぬなり。

花を看れば、如何なる興味ありや、如何なる利益ありや、左樣に面倒なる理窟も入らぬなり。如何に四方山の春景色に、心の長閑になり行くを知らずや。『雲のみとまがう櫻の盛りには、心も空になりにけるかな』と。是れ必らずしも歌人の心のみにあらず、何人の心も此の如し。草刈る村童も、蛤拾ふ漁婦も、春霞たなびくの曉、鳥歌ひ花笑ふの日、花影をこめたる朧月夜。如何に彼等が心の淸く、涼しく、高く、美しく、樂しくあるよ。彼等は何故に斯くありと知らず、然れども實に斯くある也。

されば花を看れば、如何なる興味ありや、如何なる利益ありや抔と問ふは、無用のことなり。一たび花を看れば、興味も、利益も、自から湧き來る也。

別けて人の心の大敵は、倦てふことなり。年の始めより年の終り迄、同じき事を繰り返し、繰り返し爲す時には、氣も疲れ、心も倦み、何となく懶くなり來るものなり。就中恒に一家の中にありて、其の責に當る主婦に於ては、其の境遇の變化最も少なきが爲めに、最も此の憂ひ多しとす。されば看花の最も必要なるは、主婦を始めとして、家庭の内に働く人々にありと云はざるを得ず。

吾人は此の樂しき日に、齷齪として、家の中に閉ち込

らんより。寧ろ一家を擧りて、老を扶け幼を携へ、看花に出懸けんことを勸むるものなり。斯くすれば一家の和樂は猶更らの事。誰彼の差別なく、氣も新らしく心も勇み、其の胸の中は、春風の吹くが如く、其の情は花の如く淸くして馨はしからむ。一人此の如くにして、一人修り、一家此の如くにして、一家治まる。是れ豈に天倫の樂事にあらずや。

斯くすればとて、別段多くの費用もかゝらざるなり。贅澤をすれば、數ず限りもなし。併しながら手辨當を携へ、空らに知られぬ暖かなる雪の下、地より地へ敷きつめたる靑き茵の上に欒圑して、笑語しつゝ餐を傳ふるも、亦た快ならずや。よしそれ程迄に簡易ならざるも、葭簀張の腰掛に打ち寄り、櫻餅なり、蜜柑なり、パン菓子なり、鮓なり、各その好む所に從ふて、其の腹を充たしその口を飽かしむる、亦た樂しからずや。』

花看とさへ云へば、世間には殺風景至極の事多し。俳句にも『酒なくてなんの己れが櫻かな』とありて、恰も酒は花看に欠く可らざる必要品となり居れり。彼等の多くは花を看んが爲めに花を看ず、酒を飲まんが爲めに、跳ねたり躍りたりせんが爲めに、或は人に對して申譯けなき程の亂暴狼藉を振舞はんが爲めに、花看に托して、遊興するものあり。よしそれ程迄にあらざるも、上等社會の人々は、家族同伴よりも、寧ろ賤婦を同伴して、遊興し。己れ獨り春を占めて、一家は冬枯れの悲しき有樣に沈ましむるものあり。此等は皆な大なる心得違ひにして、獨り家内の人々に對して、相ひ濟まざるのみならず、亦た淸き、潔き、花に對しても、相ひ濟まざる次第ならずや。

樂は六七分の所にあり、意を放まゝにし、情を恣まゝにし、己れ一人のみの快樂をのみ貪らんとするは、他日に於て大なる悔ひを來すものなり。凡そ快樂と節制とは、相ひ離る可きものにあらず。花を看るにも、月

を眺むるにも、それ〲の作法あり、禮儀あり。一家相共に樂しみ、相共に悦び、一滴の涙もなく、一片の不平もなく、苦情もなく、一家を擧げて、春景色となしてこそ、花看の冥加もあるものなれ。

史談

歐洲諸國王家の片影（三）

五、土耳其

あはれ新月の光りは薄ふなり、今は枝葉凋み立枯れに



西班牙王アルフォンソ十三世
（前號參看）

枯れむとする歐洲の寄生木たる土耳其に君として國運の挽回に努力せらるゝ帝アブドルハミッドの志も亦憐れむ可し。



和蘭女皇ウイルヘルミナ
（前號參看）

帝當年五十二歳、土耳其近世の明君の譽あり。今を距る十八年前、帝の叔父アブドルアジッズ帝頓に崩じ帝の兄ムーラッド五世羸弱位に堪へざるに際し、大臣相議して帝を寶位に迎へたり。帝幼少より身躰虚弱にて內氣の聞へありけるが、穎敏にして思慮深く、退隱の

生涯を好みて貴公子の逸樂に耽らず、即位の年迄に已に六萬ポンドの金を貯蓄し居られたり。二十六歳の年歐洲を漫遊して深く吾不學を恥ぢ、歸來深宮の裡に戸を閉ぢて讀書三昧に耽けられける。』當時土耳其は財政紊れ兵備弛み露西亞は已に開戰の準備に忙はしく、國勢累卵の危きよりも危かりければ、歐洲の眼は新帝の上に注ぎ如何にせらるゝやらんと見てありけるに、不思議や世人の顔見ることも稀なりし讀書公子は毅然として帝位に立ち、露國との戰爭漸く終るや否、帝は政を專にする大臣を黜け、匆卒に發布されし憲法を撤回し、麻の如く亂れし財政を收拾し、盜賊を平げ、男女の敎育を奬勵し、陸軍の組織を改め、鐵道を敷き、不完全ながらも新聞に保護を與へ、歐洲の文學科學書を翻譯出版せしめ、萬事に改良又改革を施し、大凡そ此等の事帝自ら率先して之を行ひ、他の大臣は唯帝の命を執行するのみなりき。左れば瓦解せむとする土耳其の帝國も殆んど帝の手によつて支へられ、「土耳其より何の善きもの出



土耳其帝アブドル、ハミッド

でむや」と嘲笑せる者皆驚きぬ。

土耳其の君と云へば、後宮に美人醇酒に沈湎する其心半點も人民の福祉を思はぬ君主と思か常なれども、今の土帝は眞面目の人にて、土耳其に珍らしき有爲の君なり。唯惜む可きは群臣に帝の精神を躰する者少なく、爲めに折角の帝の志も十分國中に行き渡る能はさることなり。帝の日常の生活は東洋の君主の生活よりも寧ろ英國紳士の生活に近し。後宮には素より宮女三百人あり、正后妃四人あれ共、帝は實際一夫一婦の實行者にて、色に親まず、後宮の婦人多きも徒らに無用の費多く且往々にして宮廷の變之れより起るを以て、帝は寧ろ之を一掃し去らんことを欲せらるゝも、破り難きは習慣故例にて、已に後宮數百の婦人あるが上に、帝の誕生日及其他一年に二十回、帝の養母は一名の美女を進ぜらるゝの例ありて、其美女は後宮に移ると共に侍者四名腰元六名馬馬車馬丁等夫れ〳〵差添へらるゝなり。後宮の美女三百人各々右の差添を有し別々に暮すことなれば、土耳其の宮廷費は英貨四百萬磅此頃の相場にて殆ど我四千萬圓に上るも怪むに足らず。殊に多端の費用を要するは、後宮の宮女が他に嫁する時、土帝より持參金として與へらるゝ金なり。後宮より嫁する者年々一百人、一人に付下賜の金員英貨一萬磅に及ぶ。帝素より之を廢せんことを欲せらるゝも、奈何せむ内閣の大臣高貴の面々皆此持參金と公主の爵位を得せしめむ爲め各々吾女を争ふて後宮に納るゝことなれば、俄に之を廢せば一大革命を惹起し帝は廢位か暗殺かに罹かるゝの外なし。

土帝ドルマベグチの宮に在る時は、此處に寢食する宮廷の人數實に六千人の餘に及ぶ。帝は成べく費用を節せむとて、寧ろ更に狹きイルチッズキオスリの宮を好まるゝとなり。斯る大家族の事なれば、日々宮中に消費せらるゝ麵包（土耳其人はパンを大食す）は殆んど

一萬八千封度に到り、一週間に消費せらるゝ魚類の額は十噸に上り、魚の買集に從事する者六十人、米一日一噸、砂糖一日六百封度、其他殆んど算なく、日々宮中の庖厨にて無用に棄たる物は以て十分に一百家族を養ふに足ると云へり。

土帝一日の生涯は左の如し。早起身を清めて禮拜し、黒珈琲一盞を喫し、好めるシガレットを薫らし、朝餐濟むで宮中の事を聽き、夫れより朝に出でゝ種々の報告文書を閲し、土耳其の新聞外國新聞の切拔きを翻譯せしめたるを讀み、手輕き午餐の後庭苑に散歩し池水に舟浮け、二時間ばかりにして歸つて謁見の禮を行ひ、日沒前暫らく散歩し晩餐終つて或は內謁見を行ひ若くは後宮に退ひて皇女達に唱歌奏樂せしめて樂み、おり〲は自らピアノを彈ぜらる。帝の食物は大率銀器に調理し、一器毎に封印せられ、侍從長帝の前にて封印を破り、一ト口毒味して然る後帝に捧ぐれば、帝はボスフオラスの風景を一ト目に見晴す王宮の窓のほとりの臥榻に倚つて寛帶濶袖ゆる〲と喫食せらるゝなり。土耳其の風俗として匕は用ゆるも三叉庖丁は用ひず、餘は指を用ひらるゝなり。また回々敎信徒の風俗として、帝は勁烈の酒を用ひず、其代り好んでアイスクリームを多く用ひらる。帝家にありては子女を愛し、家族を親しみ、朝に在ては事務の澁滯を來す迄務めて自から事を視る。故に後宮の宮女は多く帝を寒冷無情の君と思ひ、滿廷の臣僚は從來の帝王と一風變りて酒色に溺れず政を廷臣に放任せざる帝を珍らしとのみ思ふなり。

帝已に幾多の斷乎たる改革を行ひ、寧ろ專制に過ぐるの嫌を受けしが、其人となり仁慈にして即位以後は死刑と云ふ事殆んど無となり、また學事奬勵慈善事業に大金を擲たることしば〲にて、或は宮中の器皿珠玉を金に代へて國庫の不足を補ひ、侍者の數を減むて慈

金の用に供せられし例も多々なり。現に四千萬圓の宮廷費は、土耳其の君の宮廷費としては、未曾有の少額なり。帝亦よく外人を待し、事務の才に長け、眼識あつて內外百般の問題に判斷を下さるゝに臣下の及ばざる所多し。

若し土耳其の國運幾分か挽回の道に上り其命脈幾分か長らふることあらば、其の强半は土耳其の今帝アブドルハミツドの賜物なる可し。

科學

植物の生命

我等は神仙の昔噺の中の天女が人を愛し、もしくは天女を人が愛する時は、花の遺り取りをなせども、その花は人間の生活によりては金や銀や貴とき寶石程の價なきを以て失望を來すと聞けり。然れども我等が山野に花を尋づぬる幸福の日は、金銀の寶を得るよりも、むしろ我等の健康のために利益あり。我等若し最も小さき花の一つに付きての凡ての事を知るを得ば、我等は自然が秘めをきたる秘密の一部を悟るを得べし。されどたとひプラトーソクラテスの才能ありと雖、もし注意と、忍耐と、熱心に由らざれば、その望みは達し得べくもあらず。

植物に付きてはチユートン人の先祖は面白き談をなせり。バアルダーと稱する喜びの神ありしが、不死不老の神性を有せざりしかば、外の神々はその死せん事を憂ひて、トルの神が、彼に不死の神性を給わらんとを祈りしに、祈りはきかれて凡ての植物と動物はバアルダーを害し死せしめざるべしとの許可を得たり。

此に於てバアルダーの妻は、その夫が得たる許可を下界の動植物に申し渡さんと思ひて、地上に下りけり。此にローキと云ふ神あり之は嫉妬の神なれば、バアル

ダーが己れと同じき神性を得んとをねたましく思ひて、ひそかに容を白き鳥に變へて、バルダーの妻の後に隨がひて、共に下れり。かくてその妻は凡ての木々草々に向ひて、汝等我主人バアルダーの命を傷ふべからずとは神の命なりと云ひ渡しつゝ行ける時嫉みの神は、最も少さき紫の小花の上に坐り、バアルダーの妻が之を見落さんとを願ひつゝありしに、紫の花は、坐の下より小さき聲を出して『我を忘れ給ふな』と一



回ならず操り返して云へり。これよりその花は『我を忘れな』と名づけられ、今日も倘ほ我等が田の邊、畑の隅に至る時は、その花は小さき目を開きて、我等を眺めつゝあり、今に米國などにては、結婚の時、互に取りかわして、我を忘れ給ふなかれと云ふ誓の代に用へるあり。倘ほバアルダーの妻は、隅より隅を走り廻りて、木と草を殘らずさがして、歩きけるに、嫉の神は大なる樫の木の傍に、小さき寄生樹のありけるを見て、之れ屈強とその上に坐し、知らぬ顔して空を見けり。妻はその木の梢に來り、樫には神命を傳へけるが、その寄生樹のあるとは遂に氣づかずして去り、己れは凡ての樹に神命を傳へたりと安心して居たりけり。

或る日の事なりしが、外の神々はバアルダーの不死不老の神性を得しとを試み見んとしければ、その妻は或る寄生樹の枝を取りて、弓と矢を作りて、その兄弟に與へて射さしめたり。憐れむべし不運にも、その木は神命を聞きもらしたる木なりければ、矢はバアルダーの胸に通りて、その塲に倒れたり。その血の一滴、そのやどり樹の果に付きしかば、果は赤くなれり。その木は苺なりしかば之れより後は、悲しみて涙の滴たる

如き果を結ぶに至れり。姝の神は之れより白色を失なひて、黒き烏となり、神々に憎まるゝに至れりと。昔しはかゝる虚誕にて、自然を説明せしが、今は更らに說明の方法に於て大なる發達をなせり。

花

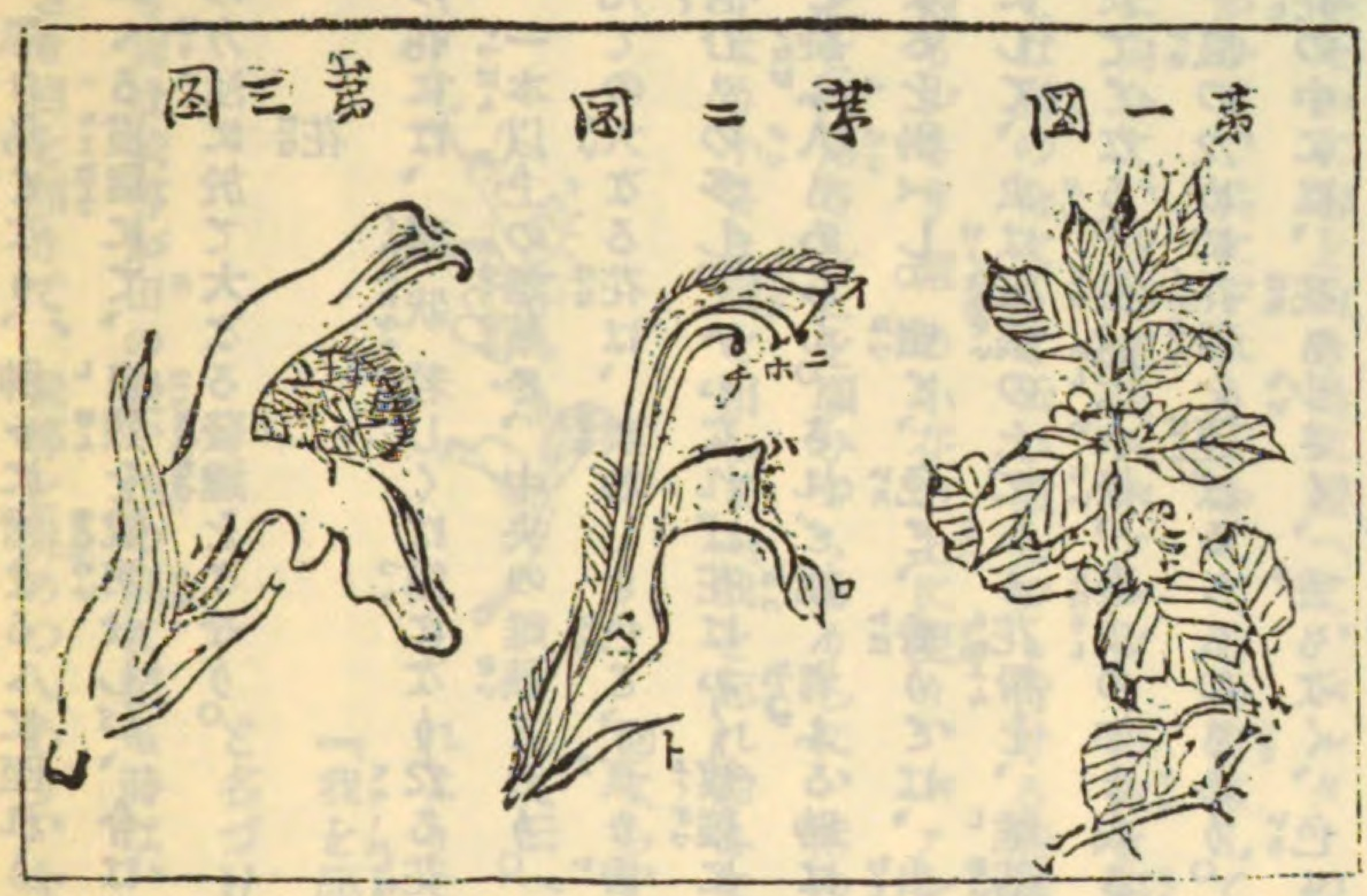
通常の花には、環狀若しくは筒になりたる花瓣と、萼と、一本以上の雄蘂と、中央の雌蘂とあり。而して殆ど凡ての大なる花は、美わしき色と、良き香。又た蜜を含むもの多し。いかなれば花はかく複雜に出來居るやと疑ふ人もあらん。されど能く考ふる時は、即ち明瞭なるを得べし。蜜と、色と、香りとは、虫を呼ぶ爲めにして、虫は雄蘂の上にある花粉を、雌蘂に運ぶの手だてとなる。松、樫、水松、秦皮の如き或る一種の樹は、風のために花粉を運ばるゝものもあり。又多くの草花の中には、花も少さく、香もなく、色も美しからざるものあり。是等は多く葉に先きたちて、花を開くが故に、花粉葉のために防げられずして、自ら好く雌蘂に達するが故に、その花粉は多量要せざるべからず。芍藥は一つの花に三百萬より、四百萬粒の花粉あり。蒲公英は、一花に二十五萬計りの花粉ありと算せらる。

虫が蜜を尋ぬるには、色と香とを手引きとなすものにして香は夜を勝れりとなす。

解剖したる蕁麻の花

第一圖は原野にて多く見る處のいらぐさの枝を顯はし、二圖はその花の解剖したる處を示めせるが、花の頭には(イ)屋根の如きものあり。下(ロ)には突き出でたる卓子あり。その中程(ハ)には齒の如きものあり。屋根の下(ニ)は雄蘂(ホ)は雌蘂にして(ヘ)の管の中に、蜜あり、何故に此花はかゝる奇妙なる形をなせるや。何故に屋根は突き出でたるや。その蜜は何の功用をなすやと問ふに、蜜は虫を呼び寄せ、虫のために雄

蘂が、花粉を雌蘂に送るの手だてとなりて、花の繁殖



第一圖　第二圖　第三圖

を來すとは、勿論なれども、花の白きは殊に虫の注意を引くに適し、屋根の出でたるは、雨露のために蜜の流れ出づるをまぬかれしむ。

ノッチンカム、キャッチフラー

之れは奇妙なる花にして、全く朝顔の反對なり、色は青白くして、誠に美しき香を持てるが、五ッつゝ二た組の雄蘂なり。夕方に及びて花を開き、五ッの雄蘂は一組のみ熟して、花粉を散し、朝に至れば全く枯れたるすがたとなるも、亦た夕刻に至れば、再び新らしき狀に立ち返りて、更らに新らたなる五ッ一組の雄蘂は、花粉を散じ、夕刻に至りて、枯るゝ事、始めの如く。三日の晩は最後の花を開き、うねりくねりたる雄蘂は、長く伸ぬも、羽虫他の花の花粉を持ち來るに在らざれば、果を結ぶと能はざるなり。

蠅は蜂の賢きに劣る

蜂は賢しとき虫にして、己が食物のある花と、無き花とを見分くる事、容易なれども、蠅は愚にして屢々小

さき花に聚かるゝとあり。バルナシヤと云ふ水草は、十中八九は花粉を生ずるとなきも、長き蘂の付け根の所に、黄色にて光りたる瘤の如きものありて、屢々多くの蠅を惑はせり。

紳士、淑女花（ロードエンドレデー）

紳士淑女花と云ふ草は細そ長き管の中程には、下に向きたる毛の如き雄蘂あり。小さき蠅が、よき隱場なりと思ひてその中に入らんには、入ることは易けれども出づるを得ざるが所に、



その蘂の枯るゝ迄、そこに籠城す。雄蘂は職分を全ふして、後は枯れはて中の四人を赦して出しむるなり。」

赤、白、黄色の花多き理由

理學者アリストートルは、一の奇妙なる事實を發見せり。こは蜂の道行を見るに、或る一つの花に蜜を見出す時は、その一種類を次ぎよく〳〵と探がし歩るき、輕〳〵しくは他に轉つらずと云ふことなり。蜂がかく一種類を丁寧に探がすとは、一は蜂のために時間を儉約し、一は一の花粉を亂りに他種の花に散せざるにあり。凡て花は夕刻を以て旨き香を放つが故に、之に盛るゝ虫共も、夕刻の方を多しとす。然るに青き色の花小さき花は、虫の注意を引き離ければ、赤き花、白き花、黄なる花は、益々多く繁殖するに至れるなりと云ふ。

果實と種子

花の凋みたる後、種子は果實の中に生ずるもの多し。之れが散布の法に至りては、中々に面白きもの多し。或る種類は羽を生じて飛ふものあり。松、楡、秦皮、等の如し。或るものは毛を以て風に吹かれて、飛ぶものあり。綿、あさみ、柳等の如し。或るものは鳥の餌と

なりて、腹中に入り、再び大便となりて出づる時、土に落ちて生へ出づるもあり。苺、どんぐり、小梅、等の如き、或は菫花鳳仙花、酸醤草、等の如きものあり。或はクラチスビールと云ふ西洋の草は、自分にて種子を地中にをし込むもあり。或は蓮花草の如く、土に落ちたるもの、來春に再び生へ出づるもあり。

木　葉

ラスキンの言へる巧妙なる解釋を假らんに『木葉は奇形と云ふ奇形の凡てを盡くして、恰も我等を呼びて、探見を促がすもの丶如し。星の形、心藏の形、鎗の形、矢の形、刀の形腐蝕したるもの。畦の如きもの。鋸の如きもの。內外に出入りしたるもの。環狀、房狀、螺旋狀、尖狀、殆ど極りもなき意匠と、色と思想を顯はし、幹の下より花に至る迄、一として同じきものはあらず。彼等はたへず我等の注意を促がし、野外運動の喜を望むもの丶如し』か丶る形の外にも、構造、織樣、表面、其他香のあるあり。好き味あり、酸きあり、辛きあり、毛の如きあり、滑なるありて、千態萬狀、殆ど言葉に盡し難し。



花や、果や、葉の外に尙は大切にして、驚くべき規則あるを知らざるべからず。第四圖の山牛欅を以て說明せんに葉は、大凡三寸四平方にして、芽と芽の間は、一寸二分五厘あり。重さと葉の大さとは、枝の强弱によりて異同あり。殊に熱帶地方にては熱の度によりて、葉の大小少からぬ變化あり。故に上の山牛欅の葉が、それより大なる時は、枝は折れん。それより小なる時は、木は大に衰弱するに至らん。殊に葉に付きて注意を要す

るは、多くの木の葉は、枝を螺旋状に取り巻けるとなり。かくて第六番目の木の葉は、第一番と同じすじに位するに至るものなり。

文藝

耐忍死を免る

筑峯女史

ある山里に夫婦の山賤住みけり中いと睦ましく一人りの子をもふけ喜ぶこと大方ならでいと大切にそだて居たり貧しき者の常として夫婦もろともかせぎに行かではかなはずさればとて子守を置くべき力もなくみとり子を連れ行かば稼ぎの妨げともなる故小さき籠を作りそか中に幼な子を入れつるしをき出で行く前によく乳を飲せ少しつゝ動かせばほとなく眠り静まるを待ちて稼ぎに行くを例の事とせりある日の事なりしが夫婦の出で行きしあとにて脊戸のしまりの無きを幸ひいと大なる女猿の來ていと珍らしく愛らしげに籠を動かし幼な子をすかしなんどして打興じてありしが餘りに物音のはげしかりしにや幼な子も目を覺し母なんめりと見れば見慣れぬ毛ものなりしかばいたく驚き一聲高く泣き出しけり女猿もうち驚き一旦はにげんとせしが何思ひけん立ち歸り來てこの幼な子を籠より取出しかきいだき一目散ににげ行きける』

實にや不便の山里は酒屋へ三里豆腐やへ二里てふ諺の如くいづくへ行くも道遠くいそぐとすれどもはかどらぬこゝちこそすれかの夫婦は晝食せんと足を早め我家にちかづきぬれど泣き聲だにもきこへねばまだよくいねて居るやらんと母は表の戸明くるもをそしと乳房を出しいざ飲ませんと籠の中フト見ればこはそもいかにこはいかにいかなる者の仕業ぞや中はもぬけのから衣たゝぬき捨て影もなしこは悲しやないかにせんと妻

は狂氣の如くはせまはり夫も不審の顔色にて心配せしが稍ありて云ひけらくいまはなげき悲しむとも詮すべなしたゞ此上は心あたりをさがし見るより外はなしとて泣き沈める妻を勵まし二人りして家の問圍は云ふに及ばず近所の山邊をそこかこゝかと尋ぬれど更に手がゝりあらざれば妻は涙にむせかへり身もうくばかりに嘆きつゝ歩む力もぬけ果て伏しまろびてぞ泣くばかりサスガの夫も茫然と松が根に腰うちかけ手を打組みて思案にこそはくれにける

折しも吹き來る風の音にたぐへてきこゆる泣き聲は確に我が子の聲ならずやと夫が云へば妻も耳をそばたてゝ聽けば覺えのある聲なれば二人りは喜こび立ち上り聲をしるべにあたりくまなくさがせども更に姿の見へざればこそ我等が心の迷ひなるかアナ力なしもろ共にためらふをりしもまたも聞ゆる泣き聲にこはいぶかしと仰ぎつゝ一と本の大松の梢遙に見上ぐればこはそもいかにいとも大なる繁みが枝に見ゆるあやしき衣の色もしやと妻にさし示せば妻はのび上り〳〵見て聲を上げあれ〳〵まさしく我が子が猿に抱かれ居れり早く上りてよたすけてよ疾く上りてたまはれとさけべば夫は制しつゝそは汝の思淺かんめり我れ木にのぼりあの猿をころすはいとゞ安けれど今われのぼると見なばちく生の悲しさは忽ち我が子を投げ捨てゝ外の梢にうつるは必定然らば子供はたすからじまづとも角も我れにまかせて置きねよと云ひつゝ妻を引立てゝ傍なる一むら茂れる木立の内に二人りとも身をひそませ靜まりかへりて居たりける妻は唯々一心にあはれみたまへ我が神よ日頃のまとをあらはしてこの幼な子を助けよと天を仰ぎていのりける

暫く立てども猿の下り來る樣子もなければ夫は何にか思ひ出にけんよく妻に申しふくめ御身は靜かに此に待ちて居られよと云ひつゝ忍びて我家に行き例の籠を持

ち來り猿の上れる松の木の下枝にこそはつるしつゝ妻もろ共に再び木蔭に忍びて待てば虫がしらすかおさな子は一きわ聲高く泣き出せばサスがの猿もいとこふじにけん見上げては見下せしが下に籠のあるを見てあれに寢かして動しすかさんと思ひしにやそろ〳〵下りくる有樣を木の間より見て居し妻は堪へ兼てとび出たさんとするを夫は打ち制し今暫くの堪忍が子供の生死の分け目なり我が云ふ通りを守れよと尙ほもひそんで見てあれば猿は小兒を抱きつゝ下りながらも四方に氣を配りあたりに誰もあらざれば心ゆるせし有樣にていそぎ下り來つ籠におさな子を入れつゝもすかしてやらんと動かしてはいと興して居たりけるその中に虫などに刺れしにや猿は唯一心に毛を分けて虫を探るより外に餘念のなき樣子を見てとる夫は大喝一聲木陰をとび出で叱りつくれば女猿はイトモ驚きつゝ一目散に遁れ行くいざ來ませ我が子を御身に渡すべし早乳を飲ませてやりねかしと云ふ言の葉も待ちかねて妻は走せ來りおさな子を抱き上げ嬉し涙ともろ共に是れ全く我が夫の計らひにて危き一命拾ひたりと手を合せて拜まんとするをまた推し止めこれはこれ全く日頃信ずる神の御陰と耐忍との賜なりと說きさとし夫婦もろとも感謝しつ又將來の注意ぶりなど語り合ひ妻は幼な子抱きつゝ夫は籠を背負ひつゝ我が家へこそは歸りけれ

チェレー城下の盲女

富士子譯

その一

白雲の　棚引く峯の麓にて　チェレー城の聳え立つ
向ひの野邊は梅林檎　巴旦杏などくだ〳〵の
なり果物の青白く　なり行く頃に時はしも
セントヨセフ御祭の　水曜の日の朝まだき

靜けき里にこの歌は　謠れにけりいさや聞なむ

「玉ほこの　道をきよめよ
香はしき　花をぞ播けよ
美くしき　花にも勝さる
花嫁は　家をはなれて
歸ぐなる　道をきよめよ
花環もて　かされや／＼
うつくしき　其花妻の
けふはしも　通り行くらむ
こゝらあたりを」

天さがる
鄙の心に歌はれし　此古歌は久方の
雲井開けて其聲の　洩るにも似しあれを見よ
優しき里の少女等は　小童後に從へつ
同じ調をうたひつも　登る山路の高ければ
み空に近き心地して　惠も深き天神
この世に降す御使の　面影さへも忍ばれぬ
山のかけ路くたりきて　みどり深むる谷かけの
青葉つゆけき下道を　たどり／＼て鶯の
さへつる如き聲音にて　うたひながらもいち早く
セントアモントへと　行きにけり

「玉ほこの　道を清めよ
香はしき　花をぞまけよ
美くしき　花にもまさる
花嫁は　家を離れて
とつぐなる　道を清めよ
花環もて　かされや／＼
美くしき　その花妻の
けふはしも　通り行らん
こゝらあたりを」

あなたには
パアチストと呼ぶ若者の　妹脊の契り結ぶなる
乙女の君と諸共に　婚禮式の花環もて
立にけるかもたのしげに　いと嬉しげに
山の端に
登る彌生の旭影　み空はとほく晴渡り
霞ふきとく春風は　たえなる花の香を送る
誰かあはれとめでざらん　誰か床しと思はじや
都離し山里の　作らぬ庭のめづらしき
垣根の花を見るさへも　いと清けきは村里の
婚禮式にこそあるならめ
たえなる奏樂きくにつけ　優しの胸はさゝなみの
打やしつらん時ならぬ　紅葉を顔に散らすなる
樂しくおどる少女等も　進みつかける若者も
心の底の打とけて　かなたに集ひこゝに舞ふ

折うしもあれや花嫁は　つぼみの口を開きつゝ
「我を捕へん　其人は
今年の中に　遂にまた
嫁ぐなるらん　いざや〳〵
捕へて見よや　乙女等よ」
我さきに
花の衣を捕へんと　花嫁目かけ追ふ樣は
花に戯ふる春の野の　胡蝶の如く見にける哉
清くなる
花の蕾の少女等か　舞ひつ狂ひつ樂しげに
笑靨に波をたゝよはす　此日になどてパプチスト
聲も洩らさず歎息つき　佇立むなるかいぶかしや
野邊に咲なる姫百合の　姿に似たる手弱女を
妻にめとらん晴のこの日に

ありし世の
セントジヨセフは云ならめ　切なる戀は醒むべきか
否とよ我は思へらく　彼はやさしの乙女なり
情けを宿す月の眉　誰と比べん外にまた
あはれ無情の戀人よ　行末かけてと昨日まで
ちぎりし事を忘草　野邊につみつゝ夕方の
高ねの花を手折るなる　人や問ふらめバプチスト
何悲しみてかくやある　愛の眉はそも何故と

吹き拂ふ
松の音寒き山蔭の　世のうき事は白雲の
柴の編み戸に月花の　眺めも見えぬ目なしどり
鳴く音忍びて住へるは　名をマガレットと呼なして
功勞ありし老人の　愛娘とはきこえけり
讀む人々よ聞ねかし　一年前の其日まで
鄙にまれなる一本櫻　みねも心も美はしく

バプチストとは玉椿　幾千代かけてと契しを
哀れやうたてすさましき　流行病のおそひ來て
愛と情のこむるなる　優の眼は見えずなりけり

たらちねの
父なる人の命せごと　叛き兼ねてぞいたはしや
妹背のちぎり結びえで　安き心も荒磯に
寄せ來る涙のそれならで　涙を袖に戀衣
ほすべき術はなかりける　我家うしとや戀人は
のかれてや行く旅の空　歸り來にしはやう／＼に
三日の前の事なりし　幾春秋を諸共に
過さんまでのちかひなる　黃金のひもをなけやりて
エレジヤてふ手弱女に　思ひ通はし婚禮の
式さへ擧げんけふの日に　猶忍ばるゝ道のべの
戀わすれ草波よする　岸の汀の戀忘日は

少女等は
あはたゞしげに云るやう「アナよセルサよ メーリーよ
カードも出て見そなはせ 彼方に來るは 跛の
ジョンにてこそはあるならめ」 掬ぶ清水のかたへなる
繁れる桑の下陰に 腰はあつさの弓を張り
寄る年波に黒髪の 昔の姿消失せし
老媼來にけり人々は 走りもて行くつかの間に
千里をかける天舟の 鳥の翼を付けしごと
集ひ來にけりまたゝきの間に
跛子の
ジョンてふ老婦は世人の 幸禍をうらなひつ
こゝらあたりの若者に いとも樂しき婚禮の
日さへ語りて言の葉に 僞などのあらざれば
過き來し里はいづ方も 喜び迎へいたはりて
めでざるものはなかりけり

さはいへ今日は此老婦 いと恐ろしき面もちに
白くやつれし眉の下 雙の眼は打つ筒の
ほのふ輝く如くにて イみ立ちて深緑り
いろ濃き衣をけふ晴と 着飾り盡す花聟の
あてなる顔をにらみけり
輕く花嫁手にふれつ 片手に持る杖をもて
十字のしるしなしつゝも
「思慮なきエンジラ 心せよ
僞り深き 此人と
妹脊の契り 結びなば
千代の住家の それなれで
御身の手にて 墓を堀り
當世の暗へ 行く如し
あだしの露と 消ゆるなよ
東風ふく風に 散らさすな
その美くしき かんばせを」

老婦の言葉花聟は　聞やきかずや手足共
わなゝき震ひ顔ばせは　青ざめにけり胸に對へて
花嫁は
何と答へも梨の花の　雨になやめる風情にて
露の涙は重たげに　臉のあたりに散かゝる
とはいへ清き川の瀬に　濁る雫の三つ四つは
物の數かは婚禮の　樂しき群は舞ひ始め
歌ひつずけぬその中に　花聟の君唯獨り
憂の眉をひそめつも　恐れおのゝきかんばせは
青白くのみまさり行く
みどり深むる谷陰の　青葉露けき下道を
たどり下りて諧聲に　謠ひにけりな同じ節奏を
「玉ぼこの　道を清めよ
香はしき　花をぞまけよ
美くしき　花にもまさる
花嫁は　家を離れて
嫁ぐなる　道を清めよ
花わもて　かざれや〳〵
うつくしき　其花妻の
けふはしも　通り行くらん
こゝらあたりを」

繪畫

畫學の栞（六）

金仙

「紫や燒野を消して菫草」春の日和の長閑さに野邊に打ち出て見れば菫の花の色濃く咲き初めり之を寫さんと思はゝ左の順序に隨ふべし

（一）菫の葉、菫草は女性として畫くものなれば葉も花も軟く畫くべし（イ）の點より筆を始めて二筆にて即ち



第九圖

(ロ)を畫き餘りの筆にてそれが莖を畫くべし

(二)同じく葉、二筆、用法前に全じ然れども斜めに見しものなれば幾分か細長くす

(三)葉、筆を輕く使ふべし尤も筆は二筆にしてよし

(四)も前に全し

(五)花は白描なり即ち前々號梅の花を畫きし筆使ひにて五瓣となし返す筆にて筆意をつけて(ハ)を畫き然して莖を付し後筆を改めて香を二三點打つべし

(六)花の蕾、極々輕くすべしよく熟視して

(七)は葉のしべを入るものしべは減筆法によりて眞中に一線にてよしもしこれを白描法にてするときは即ち(二)の號を見るべし

(八)終りに雜草一二本を添ふこれにて蘭の地より生ぜし事を確むるものなり即ち

（第九圖を見るへし其の全く成りしものなり）

墨色加減は一號三號の葉は濃く二號四號の葉は淡く花も蕾も墨色を淡くして香及び莖は總て濃く畫くものなり

無聲詩話（十四）

探幽の弟に尙信あり。尙信の子に常信あり。常信幼名は三位又右近、寛永十三年京都に生れ、寶永六年法眼に叙し、正德三年一月七十八歳を以て終れり。耕寛齋、靑白齋、弄毫軒、塞雲子、潛屋は、皆其別



號なり。養朴は剃髮後の稱。

彼の畫は、用筆愼密にして、瀟洒なり。風格高く老實の所多し。蓋し彼は文運東武に移りし元祿時代に逢ひしを以て、彼が家の武士的繪畫も自ら昌平の氣を帶びたるものなるべし。

尙信の後を稱して木挽町狩野といふ。

而して尙信以後は家法定まりて、用筆の自由を妨げし故にや、再び大家を出すことあらざりき。

中に就て京狩野に山雪ありたり。又探幽の門人に久隅守景ありて其墜緖を守格せしが、皆畫風を一震するには至らざりしなり。

然れども其兒孫畫統の分派は、極めて多く、元祿

の益信洞雲の系は駿河臺狩野として統を垂れ、支流隨川峯信は德川家宣の寵を得て一家をなし、亦其統を傳へり。

家政

少年の習慣

人の性質は、習慣と言ふ言葉の中に、全く含まれたりと云ふも、過言にはあらず。言葉を變へて言ふ時は、人は習慣の一包なり。習慣は容易すく作くらる。殊に惡習程作り易きはなし。今日僅かなる事と思ひてぬせる事も、明日は早や定まりたる習慣となり、次ぎには己れの力にて取りも得ざる荷物と成る。習慣は一づゝ作る毎に、一本の糸を丸き總に合せよるが如し。惡しきも、善きも、糸の數の多けは、多き丈け、強く、少なければ、少なき丈け、弱はし。少年が學問を爲す時、職業を爲す時、考ゆる時、遊ぶ時、眠むる時、凡ての事を爲す時に、習慣は一づゝ出來居るなり。善かれ、惡しかれ、彼の一部分を作り、彼の第二の天性を作れるなり。唯れか三四十以上の人にして、その人の苦しむ所、困る所の惡習のなき人を見みるもののある乎。之を矯めんとするの勇あるにせよ、なきにせよ、皆一づゝの惡習に惱めり。誰れも善き習慣は作らざるべからず。されど少年は之れより送くる一生を、善くも、あしくも過す肝腎なる岐に立つが故に、殊に大切なり。人が身躰を曲け或は臥して事業を爲せば、肺に惡しきが如く、曲かりたる習慣を作るは、心のために惡しき病を起す也。

善き習慣を作るに憶する勿れ。始めはむつかしきが如きも、毎日同じ事を操り返して爲す中には、遂には面白くなるべし。毎日重きものを上せて車を曳き、遠方を走る者は、さぞつかるゝならん。日々大森より魚をか

たげて東京へ來り、數里の路を賣つて歩き、夕刻再び歸る魚屋は、いかに疲びれけんと思へども。他の人が心配する程には、本人は思わず、反て學生が、毎日〳〵机の上に頭を低れて、坐しをるの氣の毒さよと心配するは、等しき事なり。去る頃トラック島王弟と稱して日本に來りし人、小美田氏の家に逗留せる時、氏は家の中の美はく飾りたる室々を連れ廻りて、何れにても好む所に住まわれと云ひけるに、トラック人は最後に見たりし室を最も好むと云ひけりと。最後の室とは、馬を繋ぐために藁をしきたる馬小舍なりしと。これ豫ての習慣の然らしむる處に外ならず。凡て善き習慣の始めは、何にても窮屈に見ゆるも、慣るゝに隨ひて、反て之を好み、之を喜ぶに至るべし。

少年學生の一時間は爲すことなき老人の一日にも勝りて、大切なれば、明日爲すべき事は、今夕より定めをきて、翌朝起き出で、始めて何を爲さんとまで付く間に、無駄の時間を費やす如きとあるべからず。こは少年のみならず、世話しき妻君等は、殊に心得べし。慌わてゝ事を爲す時は、宜き事も出來ず。又たいらぬ精力を費やし、腦力を失ない、記臆力を損なふべければ平生定まりたる業は、兪々規則を定めをきて、そのために腦力を費やさゞるを習ふべし。例へば今日は何を爲さんかと考ふる暇を以て、一日の左の如き時間表を作り、無益に時間を用ひざるこそ賢こけれ。

一朝五時に起き五時半迄運動
一五時半より食事迄新聞を讀む
一六時食事
一六時半より七時迄休み
一七時より勉強
一十二時食事
一一時迄休息運動
一一時より勉強

一三時より外出訪問
一五時入浴
一六時食事
一七時迄談話
一八時一日の日記をつけ明日の仕度を爲し
一九時睡眠

かく規則を定めて勉强する人は、一日を最も優長に暮すを得べし。怠まくる程世話しきものはなく、苦しきものはなし。エピラス公スカンデルベグの死せし時、その臣等は公の骨を分ち得て、各々胸の邊りの守りの如くなして云ひけるは、之を持てば勇氣を得、物に勤勉なるを得べしと。人々が勤勉を望むは等しきに、勤勉なるを得ると、得ざるゝあるは、全くその習慣の付く迄、忍ぶと、然らざるとに由る。勤勉なる人の一生を見るに、毎日病人を見舞、毎日人を敎へ、毎日學問をなし、毎日能く睡り、能く運動なし、此ある人に取つては一日は同じ一日なれども如何に我等の一日より長きが如くなるも、これ爲すべき事業を定めて無益に時間を費さざるに由る。

トルコの諺に『世話しき人は一個の惡魔に攻めらるゝ間に怠惰の人は千の惡魔に襲わる』と又たスペイン人の諺には『世話しき人も惡魔に試を受くれども、怠惰なる人は自から惡魔を誘き出す』とあり。孔子も小人閑居して不善を爲すと云ひ給へり。如何に勤勉と怠惰が、人世に關係あるを知るべきなり。

少年が注意を要すべき習慣の多きが中にも、人に依賴の心を生ぜずして萬事己が考へにて働く事、明日爲すべき事は、今定めをく事、忍耐して事業を爲すべき事、熱心の性質を養ふ事、萬事規則正しき事、早く起る事、自分の定めたる事を曲げざる事、自分の惡習を矯むる事、是等は少年學生の最も忘るべからざる處なれば、父母たるものも心して之を敎へ導くの心がけなかるべ

からず。些々たる事なれども、一生の中には數きれぬ禍福の基となるべし。

好遊戲

寒き間は、小供は家の中にて遊べども、最早温くなれば、一時も家の中には在らず。家の中に居らぬ事は、元より小供の健康のために良ければ、進めても出したき處なれども之れに相當の慰を與へざれば止を得ず往來の道路に出で、車の行往する危き間に、或は他の小供と喧嘩し、或は犬を咬み合する等、亂暴にして危うき遊を爲すべければ、敎育養育の任ある人々は、大に注意を要すべき問題なり、

いかにして小供に面白き遊戲を與へんかと云ふに、或は面白き所に携へて行くも宜からん、摘草に行くもよからん、花見に行くも良からん、元より惡しき事は少しもなけれども、毎日遊びに携へ行く時は小供も飽き、大人も飽さ、殊に世話しき人々はその時間のなきに苦しむ事あらん、玆に最も良くして、飽かざる遊戲は、



園藝と、動物を飼ふ事なり。園藝の遊戲は前號に已に說ける處なるが、動物を養ふ事は、又た一つの好遊戲

なり。是れは只だに遊戯のためのみならず、小供をして自然を樂しましめ、博物學を知らず〱の間に實見して、覺ゆるの便あり。動物の中にも、種々のものありて、或は鳥もあり、蝶もあり、地虫もあり、飛ぶ虫もあれども、是等は小供の慰としては、餘りに手のかゝりて、苦勞多し、たとへば鶯の如きは、餌の好甚だむづかしくして、少しく適度を失なへば、死するの恐れあり、蟻の如きは、濕氣の度に極りありて、僅かの處にて住居を去るべく、其他の物も、皆食物、濕氣、温度、種々の手間ありて、誰にでも爲し得べき樂にあらず、たゞ強き魚に至りては、小供のために最も畜ひ易き動物たり。

之れより金魚は追々流行するの時候となれども、金魚は形のみ美しくして餌も面倒なり、性質も弱わければ、小供のおもちやとしては、鮒、どぢやう、鯰、或はうなぎ、鯉、貝類等に若くはなし。是等を養ふには、庭の先きへ、一疊か、二疊の池を堀り、セメントの三俵も需め來りて、極めてサラ〱としたる砂(泥土はあしゝ)を混じて、堅くねり、池の中を之にて塗り、乾固するを待つて、水を入れ、或は岩をおき、或は水草を植へて、天然の風致を爲すべし。池の底には、所々に高低を作りて、魚の游泳浮沈するに便ならしむべし、熱き時候には、池の傍に大なる樹を植うるか、上を筵にて覆ふにあらざれば、成長に害あれど、此頃はその憂もなし、池は南向きの地よりは北の方を反てよしとし、強き光、強き熱は、魚の爲めに害あり。又た食物として、パンや米等を投ずる時は、一は水を腐敗せしめてあしく、他は魚の躰のためにもあしゝ。魚には別に食物を與へずとも、一月二月水を汲み溜めをく時は、水に苔を生じ、水中の虫を生して、魚の餌には充分なり、もし與へんと欲せば、溜水の中に生ずる、アカコとて、金魚の餌に爲すもの、或はみゝず等は、最

もよし、殊に水を度々變ゆるは、魚のためによからざれば、二月に一度位、池の水の半を取り去り、新しき水を半分入るべしかく作り付けて、毎日見る時は、貝と貝の喧嘩をなす事あり。或は鯰と、どぢやうの咬み合ふ事あり。或は追ひ合ひ、或は突き合ひて、千變萬化面白き事言ふべからず。蛙の卵の孵化するも亦た見るに面白きものなり。

凡て小供には、面白くして、有益にして、健康を害せず、飽かざる慰みを與へて、悪しき友人と遊び、危き遊戯を避けしむる事を勉むるを必要とすべければ、母たるものは、常々かゝる問題に心がけ、種々工夫して小供を慰むべき事肝要なり。

ピン

英國の諺に、ピンは金なりと云へるが、妻君がピンを何とも思わずして、捨つる家には、災の神來るべし、紙屑の一片にても、ピンの一本にても、大切にする位にあらざれば、家政行き屆き、家事取り締りて、金錢の出入宜しきを得、金滿家となるの基とは云ひ難しと云ふ意ならん。今こそ澤山あるが故に、一本のピンは、何とも思はずして、折りもし、曲げもすれども、十六世紀の始め迄は、ピンの一本は、今日の八倍の價値ありき。かく價値の高きが故に、通常はピンに僅かに装飾を付して、襟止めや、其他の飾に用ゆるのみなりしかば、新年、クリスマス等の最も好き贈りものゝ一なりしと云ふ。

十六世紀の前にありては、尙ほ一層の大切なる品として、重寶せり。その頃は、上等製は魚の骨を以て之を作り、下等は木の片を以て、今のようじの如く作りて、用へり、かゝる粗製の針を以て、憐れなる妻君は、夫の衣物、小供の衣物、父母、己れの衣服迄も縫ひさし

する事なれば、その苦勞の度は、中々今日より考へも及ばし、元よりかゝる頃には、又た今日の如き飾りは多く用ひざりければ、僅かに風呂敷の如き、廣き布を三つ縫ひ合せて、手と、足と、頭と出づるに止まりしとはいへど、一本の針のいかに大切なりしかは、想像するを得べきなり。針とピンの自由に得らるゝ今日にありては、縫箔飾裝自由にして、人の家に雇れて、僅かに生活する貧しき小女も、縫ひ飾りたる半襟を、不斷に用ゆる位は、めづらしき事にあらざるも、若し今日の貧民小女の半襟を十六世紀以上に送る事を得たらんには、『時の女王も尙ほ得難き寶物なりしならんに。』かく昔の時代を考ふれば、一本の針といへどもいたづらに費やすべからず。足袋や、風呂敷の洗濯をなしてピンにて止めて、乾かさんと思ふ時は、糸にて縫ひ付くべし。或はボタンにて變へ得べき處は、ボタンにし、鍵に爲し得べき處は鍵にて代用すべし。かくなすは一時にして消へはつべき物を變して、永久用ひ得べきものと變ずるが故に、積る中には一家の財政にも關すべく、又たそれ程注意を爲す人は、萬事に注意行き屆くべければ、冗費を省き、必用のものを需め得て、一家の基之かために堅く好きホームを作るの始めなり。

出産に關する注意

やぎ生

婦女妊娠せしときは、勉めて身躰の健康を保つべきは勿論のことにして、日常の食物は申すに及ばす、起居にもまた注意し、過度の飲食、及勞力を避け、胎兒の安全をはかり、以て徐ろに出産の時を待つべし。愈出産の場合に到りなば、今更の如く驚かずして、心氣を穩かにすること肝要なり。老耄せし産婆などは出産の

中途に於て、最早生れたりなど、一時の氣休めをいふことあり、その時それを信じなば、親子共に命を失ふことあり、恐るべし〳〵。

出產の用意に、產ぼろとて塵埃の附着せし古びたる布ぎれを用ゆるの習慣あり、これ誤れるの甚しきものにして、生れ出たる小兒は皮膚柔かく、若し塵の中に竹屑樣のものにてもありて觸るゝことあらば、兒の身躰を破るべし、それのみならず、塵の中には毒性を含むものなきを保せず、されば斯くの如き習慣には依らずして、淸淨無垢なる白布を以て其用に供すべきなり。

胎兒安らかに生れたらむには、產婦は乳を揉みて其漏出を促かすことを忘るべからず、僅なる痛みの爲めにこれを怠りなば、忽ち乳の不足を告くべし、乳の不足は兒をもちたる親の大なる不幸なり、ゆめこれを忘るべからず。又生れたる小兒には『まくり』と稱するものを與ふるならひなれど、其飮用器として布にて乳形のものを製し、用ゆるものあり、これは使用に便利ならざるのみならず、乳を飲むことを覺へしむるに遠ければ、哺乳器を用ゆるに如かず、尤某醫師の說に依れば、母親の乳は初め淡く、兒の生長に應して乳も亦濃くなるべく作られたるものなれば、假令兩三日の間といへども、これを棄てゝ『まくり』などを飮用せしむるは、習慣とはいへ大なる間違なりと、此說一理なきにあらず、宜しく高醫に質すべきことなり。

出產せし小兒の身躰は、恰も豆腐の如く柔かくして未だ定らさるものなれば、其心して保育せさるべからず、無暗に背負ふときは、肺を壓し鼻口を塞きて、吸呼を止むることあり注意すべし、又手枕にて乳を與へなは、親も眠りと共に手枕を脫し小兒を壓することあり、深く謹むべし。

婦女職業案内

看護婦

婦人の職業中何が最も品位能くして慈善の心にも適ふかと問はゞ、看護婦業と答ふるに躊躇せざるべし。危急絶滅に近き患者をば、柔き言葉もて問ひ慰めつ或は撫で或は擦り糞尿の汚穢と雖も且つ厭はず患者自ら為すが如く二便の取入まで世話周旋し、事として患者の心の如く患者の心を察し看護親昵すること小見を保育する如きは看護婦の天職なり、然しながら看護婦の業たる、決して尋常平凡の婦人にては成し遂ぐる事困難なり。第一看護婦となるには終生獻身的の生涯を送らざるべからず、一生自家獨立して匹偶を求めず病院に入りて病人患者と生死を共にするほど鞠躬盡力せざるべからず、看護婦たるもの丶終生の目的は患者を親切に看護し、一日も早く全快を得せしむるにあり、されぱこそ看護婦の中には、大病大患の人を手厚く世話周旋し、遂に全快を得せしむるを以て、宛も勝利の全冠を得たるが如く欣喜雀躍措く能はず或者は自分の手より今迄患者をして一人も死に至らしめし事なしと誇るもあり、かゝる看護婦こそ眞に其天職を盡したるものと申すなれ。此外看護婦たるもの丶他の職業に比して困難なることは一々記するに遑あらず、終夜患者の「ペット」に侍り、或は藥水を與ふか或は糞尿の取入を為し、或は室内掃除を為し千變萬化の働き片時も暇あることなく、少しく餘暇ある時には看護婦に必要なる學科譬へば看病學より内外科の病論、藥劑學の一斑をも攻究せざるべからず此故折角看護婦を志しても中途にして廢するも續々なり、ア丶看護婦の業も亦難いかな。

現今東京にて最も多く看護婦を用ゐる病院は、第一第二病院を始め、東京病院、慈恵病院、赤十字社、佐藤

病院、井上病院、龍山堂病院等其他數ふに遑あらず、眼科病院には眼病患者を看護せしむる看護婦を要し、癲狂院には癲狂者を世話せしむる看護婦を要し、病院外より招聘を受くる看護婦あり、患者增加病院繁昌の故にや、看護婦の需用益々多く、若手の產婆は其本職の面白からざる處より、看護婦等に轉業するもの陸々たり。而して彼等は病院内にて如何なる業務を執り、幾何の報酬を得るかの實況を陳述せん、大抵看護婦一人に三四人の患者に當り、又は患者の希望に依り患者一人に看護婦一人附添ふもあり慈惠病院の如きは、三十人許の患者を四五人にて看護するもあり、病室の工合によりて看護婦を配當す。朝の六時と夕の六時を以て交代し、執務時間は十二時間なり、一週間毎に晝夜の交代を爲さしむ、夜間の看護婦は午後六時晝間のものと代り午前四時又は五時に暖爐の火を焚きつけ、或は手水湯を沸し、各患者の「バット」に就き、嗽及手を洗はせ、五時半頃に朝餉を遣はしめ、朝の躰温を量り、晝間のものと交代す。晝間のものは寢床及室内を掃除し（日々掃除する所あり隔日にする病院も之あり）或は藥餌を與へ或は藥瓶を藥局に送り、或は院長には擔當醫師を送迎し、或は手術の加勢を爲し、或は蒲團を乾し或は患者に衣服を着替させ、或は患者に糞尿せしめ或は患者を起臥せしめ、其執務の多忙多端なること筆紙の盡す所にあらず（夜間の看護婦も同樣なり）其他臨時の業務一々記するに遑あらず。斯くして一日の給料二十五錢より五十錢迄にて傳染病患者を看護するには、別に二十錢を增す。多年多數の患者を取扱ひ熟練なるものに至りては、月に三十圓より少からず、五十圓以上の老練看護婦あり、慈惠病院の看護婦は大抵生徒なるが故に無給料なり、併し卒業の上は病院又は一個人の家に派出して、前陳の給料を得ること容易なり。

然らば如何にして看護婦を志願すべきや、慈惠病院又は東京病院にては時々新聞紙上に廣告して生徒を募集し、小學全科卒業者若しくは、是と同程の學力あるものにして、品行方正なるものを撰擇し、試驗の上入學を許す、卒業は四ヶ年の後にあり、學課の傍實地患者に就きて熟練せしむ、其他の病院にても夫々手寄を得ば看護婦たること容易ならん。東京本郷元町二丁目に博愛看護病院といふがあり、前月廿五日を以て開校せり、同校設立の主意は專ら博愛慈善の主義を以て汎く品行方正なる看護婦を給費を以て募集す、學期を二個年と定め、前一ヶ年は看護婦に必要なる諸學科を授け、終一ヶ年は實地の患者に就きて熟練せしむる趣向なり、卒業したる後は同校附屬博愛看護婦會定規の日給により、一個人の家に派出を命じ、又は同校附屬專養館の看護婦たるを得せしむ、學科講師は重に大學出身の人にして、博士學士等其任に當り、講義錄によりて校外生を募集す、又は現に看護婦の業を執り其老練なるに係はらず、學力の卒業書なき爲め大に不都合を感じ居るものには、一應試驗の上相當の卒業書を附與すと聞けり。給費なるが故に同校卒業の後收得する看護料の中より食費等の、幾分を返濟せしむるといふの仕組なれば、中途にして廢學するものは、それ迄の給費の分を辨償せしむ、これは中途にして退校するものゝなきやうに致せるものなり、有志の諸姉妹は同校に就き校則を得玉はゞ、尙ほ詳細分明なるべし。附けて曰ふ、同校附屬專養館は矢張慈善的設立なるが故に入館料も至て下廉にして食費、看護料、席料等を合せて甲を廿五錢とし、乙を二十錢として藥料は元價を以てし、醫師は患者の意に任せ、大學病院等より撰擇するといふ安直にして且つ面白き法なれば入館者多々なりと聞けり。

手藝案内

養蠶術

耕さずして食ひ織らずして着るとは都人士の事か、別けて大都會の婦女子に至りては爲すべきの餘暇ありながら爲すべからざる逸樂に悠々光陰を費し終生郎子の厄介となりて終り果つるもの多し之を田家の婦女子が少時より妙齡の頃に至るまで養蠶、紡績、染織、裁縫等の諸藝を熟練し、居りては自家の家政を扶け嫁しては郎家の經濟を助くるに比し實に霄壤の差を見る、都會の婦女子たるもの赤面なくして可ならんや。

養蠶は最も我國の地土に適し、其の生糸となりて海外に輸出せらるゝ實に第一に位す且つ内國に於て美なる織物に織り成され、多くの人の身體を飾るは養蠶術あるが爲なり、故に養蠶術は婦人手藝中の第一位に居るものなれば、東京の如き繁花熱鬧の市街と雖も、山の手邊の一家數畝の庭園を有する家の主婦又は娘女子は手づから桑を植え自づから蠶を養ひ、手づから糸を製するの業を市井の婦女等が「カルタ」を弄し、閑話を爲し、晝寢を貪るに比すれば是非善惡の別、豈に天地雲泥の差のみならんや。

聞かずや畏くも我皇后陛下には御蠶所を置き玉ひ手づから蠶を養ひ玉ふにあらずや、以下の臣民たるものゝ婦女子、一生男子に依りて暖衣飽食し、以て天に對し人に對し汗顏耻なきとするか、目下養蠶の季節に際す故に是より養蠶術の一斑を記して一は我國の婦女子に養蠶術の職業を勸告し一は現今の養蠶家の參考に資せんと欲す、假令實行せざるも諸卿が身邊に纒ひ玉へる美しき衣服は何によりて製せられ、知何なる方法によりて織り成さるゝか、如何なる辛苦を經たるものなるかを知り玉はゞせめての幸甚なり。

春夏秋冬の蠶業――蠶業に春夏秋冬其養ふ所の季節に

從て春蠶、夏蠶、秋蠶、冬蠶の各稱あれども蠶の生育より桑の性質よりするも、春蠶最も利益多く冬蠶は最も利益の尠きものなれば、別して素人の內職仕業ならば春蠶を養ふに如かず、四季の蠶を比較せば其絲質は十と六と四と三との割合なり、譬へば春蠶の生糸にて織り成せる衣服を十年間保持し得らるゝとせば夏蠶糸の衣服は六年、秋蠶糸は四年、冬蠶糸は三年位にて切るゝものにて又春蠶糸の衣服は其の折り目の切るゝや毛吹立つと雖も、夏秋冬三蠶糸の衣服の折目は毛吹立たず、恰も剪刀にて剪りたらんが如し、これ夏、秋、冬の三蠶絲の質脆弱なる證據なり、隨つて生糸の直段に於ても春夏秋冬の蠶絲により各差別あり、且つ夏以下の蠶業に至りては素人の能くする所にあらざれば一年に一度春蠶を養ふのみにて內職仕事には澤山と知るべし。

三種の養育法——春蠶を養ふに三種の養育法あり曰く天然育、曰く折衷育、曰く温暖育。天然育(或は清涼育ともいふ)とは天然の氣候に從ひて飼養するの法なり、折衷育(或は清温育ともいふ)とは氣候不順なる時節のみ火熱を以て其温暖を補ふ飼養法なり、温暖育とは始終火熱を以て適度の温暖を取り飼養する法なり。此三法中孰れか最も良法なるや、天然育が最も蠶性に適へる如く聞ゆれども強ちさるにあらず、蠶の性は甚だ脆弱なるものなれば、之を飼養せんとならば充分の保護を爲さゞるべからず、蠶は急寒急熱に堪ゆべきものにあらざれば、始終一定の温度を保たしむるを要す、天然育は可は則ち可なりと雖も、天然の季候には寒暑冷熱一定せず、若し天然育にのみ放任せば脆弱なる蠶は外氣に堪ゆる能はざるべし、且つ數千の蠶兒等蠶簿として一函の中に群居すれば炭酸氣及び糞尿其他の汚穢物多くして空氣を腐敗せしめ惡臭等を醸し濕氣を生ずる等種々の弊害を生ずるに至るべし、故に空氣の流

通、糞尿の掃除、濕氣の豫防等に充分注意せざるべからず、これ、火熱が蠶の飼養に必要なる所以なり、其他火力によりて生せしむる温暖が蠶の生育に必要なる條々記するに遑あらず、温暖育は最も蠶の發育に適當したるものなり。温暖育に緩飼、急飼、中飼の區別あり、緩飼とは温度を低うして緩々養ふを言ひ、急飼とは温度を高めて急速に養ふを言ひ、中飼とは温度の高低、日數の緩急共に中庸を得るの養育法なり。此三法中何れに因るか、初心の人は漸次緩飼より入るを安全なりとすれども、これより陳述するは現今一般に行はるゝ所の中飼法に因り逐次記述する所あるべし、緩飼と急飼の兩法の異なる所は、只だ温度の高低にありと思はゞ可なり。（未完）

男女の帶

男帶を製せんとならば能く疊み皺を延し、別に心となる布(白木綿)を二重にし(博多織の如き織地の厚きものは心の白木綿は一重にても可なり)縫込より一分程狹く裁ち眞綿を薄く引きて心と表と弛まぬやうに平坦ならしめ、絎針もて細かにくけて強く壓抑をかくべし、而して其品物に至りては目下最も流行するものは本場博多の微塵縞、若しくは子持筋若しくは白茶、紺、鐵、藍鐵、納戸の色合最も好し。

女丸帶は縫方と絎方と二法あり絎方は男帶と等しく唯だ彼我廣狹の相違あるのみ、縫方は先づ裏の方より等しく二ッに折り兩端より縫ひ中間を明け置くこと一尺許、別に心の幅、皮より一分短くして心の兩面に綿を敷き心の一方の片端を表に通らぬやう綴ち附け(丸帶ゆゑ兩端を綴ち附くるに及ばず)心の一所に寄らぬやう幾重にも疊みて表へ返へしつけ糸をかけ而して後、中間の明きたる所を絎け終らば壓抑をかくべし、扨近來は如何なる織物を流行するかといふに、繻珍第一等の位置を占め、實に繻珍織は織物社會の大王となりた

り、織方には色々あれども畝織、鱗形等第一の流行にして模様は色々あり、色は淡茶、利久茶、淡鼠又は種々なる淡鼠宜しく、若き婦には赤地も宜しく、素より派手なる色合を用ゐて差支なし、價格は一筋十八九圓より隨分華美にして高尙なる品あり、呉服屋に就かば品物の是非善惡は諸卿の鑑識の中にあり。

女腹合帶は兩面裏を出し一方をずつと縫ひ終らば異なる織物と異なる織物とは相連絡して宛も丸帶の工合となる、これより丸帶を製するやうに、兩端より縫ひ進み中間を一尺許明け置き、別に心を造り綿を敷きて帶皮の裡へ入れて中間の明きたる處を縫ひ潰すこと前述丸帶を縫ふが如くせば一筋の腹合帶を得ること容易なり。織物は繻珍に繻子の打合せも宜しかるべく、博多に繻子も宜しかるべく、色合と柄の流行は丸帶のとさら〴〵相違あるべからず、前陳に照し見ば不可あることなし。

裁縫十二戒

(一) 薄地の衣服又は古服等を縫ふときは猥に針こぎすべからず

(二) 裁物庖刀又は鋏の利鈍を試みたる後ならでは裁ち切るべからず

(三) 入用より餘分の糸を針に通して糸の切れ端を捨つるは裁縫に未熟の者と心得べし

(四) 衣服の上に裁物庖刀や鋏等の類を載せ置かば誤つて衣服を傷くるの恐ありと知るべし

(五) 汗染みたる手やあぶら手を拭はず衣服を取扱ふは不可なり

(六) 白地の品物衣服等に色糸にてしつけを掛くべからず

(七) 衣服のほころびを繕ろはずして捨て置くべからず

(八) 待針、留針等を等閑にさし置くべからず

(九)入用より餘分の糊を製し腐敗せしめざるやう心を用ゆべし

(十)有り丈けの反物を裁つときには所々にて餘分の小切を出だすべからず

(十一)傷又は破れの修繕となるべき小切を猥に放棄すべからず

(十二)裁ちたる反物を亂雜にかさね置き又は皺等を生ぜしむべからず

社交一斑

流行の栞　春夢

櫻花爛熳美服翩々

今や櫻花の好時節なり、都下百萬の人衆は日々花を尋ね蝶を追ふて消光す、其樂其興窮まる所を知らず。

彼處の公園此方の各所花ならざるはなく亦人ならざるはなし、老を扶け行く若者あり、小供を携ふる妻婦あり、旦那は男兒の手を牽き、娘は母親に伴はる、彼等の花見の衣裳は如何、左に流行の衣服とも思はる重なるもの二三を擧げん。

稍年齢の長けたる婦人には微塵縞又は崩し縞、變り萬筋、又は木賊縞のお召縮緬を着て古代形更紗縮緬の下着を被るもの重に高等なる扮裝なり。

次は小紋織のお召二枚揃に着たるもの又は下着一枚を珍色にしたるものも比々見受けたり。

其次は縮緬の小紋二枚揃或は薩摩筋(小持筋)の縮緬二枚揃に着なしたるものも多かりし。

以上の裏地は珍色の縮緬か甲斐絹か絹かなり、色は藍鼠、梅鼠、櫻鼠等。

羽織を着たるものは重に黒縮緬の三紋七分五紋三分に見受け小紋紋織も屢々見受けたり。

妙齢の婦人は立枠形或は波繋ぎの小紋お召を着たるは高等の扮裝なり。

其次は鼠地、藍鐵地の飛絣、矢絣、井桁飛白、蘭立縞のお召にして、其次は山絲織か八丈織にてありき。

十歳前後の娘兒は幽禪縮緬の衣服に同じ被布を重ぬる風情可憐掬すべし、裏は珍色の縮緬か甲斐絹多く、色は淡紫、藤色、紅鼠、櫻鼠等誠に美々しかりし。

右に述べたる婦人の衣服は薄綿入八分袷を二枚重にしたるもの二分

なり。
左に男子の衣服を記さん。

大島紬の二枚袷に紫糸の羽織を重ね、本場博多淡色微塵の帶をメめ、繻珍鼻緒の雪踏をちやらつかせるものは、米屋町の人か商家の若旦那と察知せらる。

紫糸の小袖に縞「セル」の單衣を重ね絹糸織の羽織を着るか、又は結城紬の上着に米澤琉球の下着を合せ縞紬若しくば結城紬の羽織を着たるものは、手堅き人物と察知せらる。

黒七子の三紋羽織に淡色市樂の二枚重ね、繻珍紋織の帶の間に金鎖をヒカつかせ、黒山高帽子を眼深に被り、手に「ステツキ」口に「パイプ」と御座るは官員躰と察知せらる。

以上男子衣服の裏地は淡花絹か、羽二重金巾を多く見受け申したり。

淡色双子の羽織、衣物は商人職人連、赤縞の双子を被て背に小兒を脊負ふたるはおかみさん連なり、絣又は飛白の双子の羽織を着けたる書生連の羽織紐は甚に依りて太く白く山鳥の尾よりも長かりける。

金モールと摘み製と

昨今髪具に何が最も勢力あるやと問はゞ、金モール製と摘み製に限ると答ふるに躊躇せざるべし、これは織物社會に繻珍が最も大勢力を奮ふが如く、金モールと摘み製も髪具社會――殊に花簪社會の大王となりけり。目下櫻花の好時節に際し、花より美なる娘兒等が頭上に飾れる花簪を見るに、ゴム又は布帛製の櫻花等は何となく下品にして高尚ならず趣も亦深からざれども、可愛き摘み製の花簪を翳せるを見るに、美にして高尚なることを疑ひなし、摘み製の精巧の製作を得るに至りし事は前號にも記し置きたる如く、成るべく細にして細工の巧なるを尚ぶ、今は櫻の花の簪に瓢簞又は都鳥の附きたる小さき花簪を最も多く見受られ、少々早計の沙汰なれども時の花を頭髪に咲かせたるもありき。金モール製花簪も銀婚御式以來は益々使用するもの多く種々の花簪は申すに及ばず、中差にも兩天の丸玉金モールを用ゐ又は摘み製の精美なるものに金モールの燦爛を添ゐ一段の高趣を添ゆるもあり實に金モール製も亦精巧の域に達せり。

幽禪の手柄

此頃「なまこ」の代りに幽禪の手柄を、銀杏又は唐人髷の髪に用ゆるもの弗々見受けらる、模樣は菊畑、楠玉模樣に金糸を入れたるもの。年齒若き婦人には赤、藤紫、水淺黄、鶸、肉色多く、稍年齒長けたる婦人にはお納戸、黒、藍鼠、梅幸鼠最も多く見受けらる。之を小間物屋に聞きしに近來非常の賣行にて目下品の缺乏を告ぐる程にて引續き西京に注文し居れりと其價は銀杏返し用模樣二つ入十錢より十五錢唐人髷用模樣三つ入十五錢より二十錢に至るといふ。

女夫髷

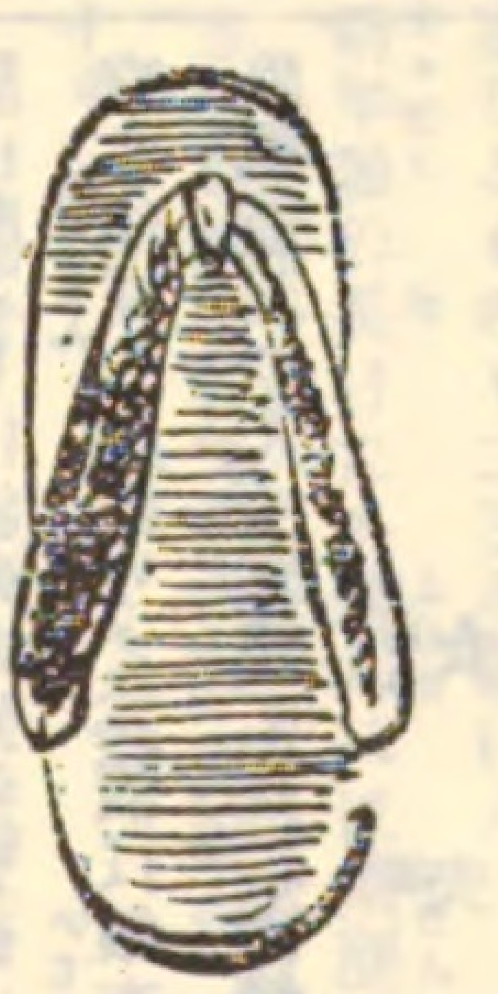
根懸も追々夏向となるにつけ淡泊なる物とあつさりしたる色が流行する

は申すまでもなし、去月より福助好みお三輪懸と申す根懸弗々坊間に見受けたり、これは三月狂言に中村福助が、妹背山の狂言にお三輪を勤めたる時使用したるものが忽ち流行となりたるものと言へば成程流行は神速なるやうなれども、實は始めより此道の商賣人が役者を利用して一番あたゝまらんと仕組みて人氣役者の新駒に新規の根懸をかけさせ、さてはお三輪懸なんどゝ言ひて世に擴がりしものと知るべし。されども當時向には餘り淡泊ならざる所より流行と申すまでの勢力を得ずして止みたり。昨今最も流行と見受け申すは圖によりて示さるゝ如き『女夫懸』といふものなり、これは平打の絹製にして一方は白一方は紅又は紫其他種々なる淡色を白とに配合し二枚を以て一懸となしたるより、さてこそ女夫懸の名を得たるなれ、其意匠は前號に記載したる帶締の『相ひ結び』と變らず、一懸五錢位の由にて最も民平的の意に適したるものなりければ多くの婦人間に流行するに至りしなるべし。



都下駄

『都下駄』とは如何なるものなるか、これは花見下駄とも稱して可なるべく、昨今の櫻時に履くもの都人續々たりければ、終に都下駄の名を得たるなり、其形は圖によりて示さるゝ如く、丈は餘り高からず、最も異なる所は、其鼻緒なり、巾の廣きこと八九分、前鼻緒は白の革を用ゐ總躰の緒は「セル」又は繻珍に裏を鼠か白の鹿子を合せ、疊は餘り宜

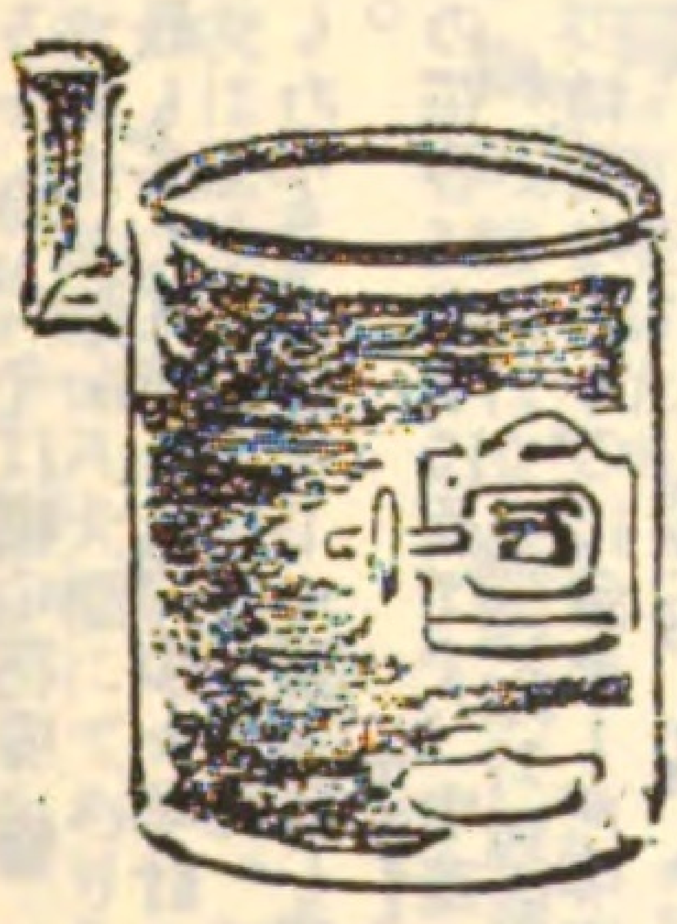


（都下駄）

しきものを用ゐざれども好により南部表を附したるもあり、一足の價は十五錢より二十四五錢迄最も多くの社會に用ゐられども、都下駄を履くものは通人らしき人に多く見受けらる、何樣平民的の流行にして安直のものにしあれば履物社會の流行品とはなりにけり。

洋和折衷竈

近來種々なる竈の製作あり、中に而も多きは鐵板を以て圓筒體に形り、上より鐵板を以て蓋さする所謂西洋竈は大低中等以上の臺所に用ゐらる、其他福神釜といふもあり西洋竈の種類二三に止まらず、或は價を安直にせんと土製のものもあり塗製のものもありて其形鐵製の西洋竈に摸造す　而して是等西洋竈の便利とする處は、炭（炭を以て焚く薪を用ゐず）の經濟なると、時間のかゝらざると、人手間のかゝらぬと、冬なればストーブの代用となるが重なる効用なり、從來日本的の竈なれば、薪の焚工合にも法あり又打捨置く時は火の消ゑ失せることあり



（和洋折衷竈）

て、飯か其他の煮物をする間は始終一人は竈の傍に附き添ひ居らざるべからず、然れども西洋竈は炭を相當につぎて火種を與へ置かば獨手に火は起り煮物は煮ゆれども、最も時間に注意せざるべからず、少しにても時間を過さば火が盛なれば蒸附のお飯を得ること誠に妙なれば、此失策と鍋の鉤などにて、手を燒くは、注意なき下女等に能くあることとなり、今一つ和洋折衷竈とも申すべきは、總躰を鐵板張にし、上を明け放しにし、釜を懸くれば丁度蓋となる、一方の側面に烟筒あり、前面には火を焚く所と空氣の入るゝ所あり、これは炭を用ゐず薪を以て焚く工風にしたり、從來の日本竈に比し薪の燃料も少く且つ時間も少なし、二升焚三升焚五升焚と、其形大小異なるありて價も亦各相違あれども、二升焚は三十錢より購ひ得らると聞けり。

正誤　前々號の流行業中流行の風呂敷とありしは流行の服紗の誤

日用品物價

◎白米（一個に付）●一等米八升七合●二等米八升九合●三等米九升二合●四等米九升五合●五等米九升八合
◎雜穀●本貫六麥三斗〇●臨鶸大麥三斗〇五合●裸麥二斗二升五合●相州小麥一斗七升二合●常州小麥一斗八升●下總小麥一斗八升●千葉小麥一斗七升八合●札入竹林麥一斗五升五合並一斗七升五合●上割麥一斗七升並一斗八升五合●肥後上小麥一斗七升三合●川越白さ一斗〇二合●本場中豆一斗六升●川越豌豆一斗五升五合●鍋隠元一斗四升三合●吉原大豆一斗七升五合
◎油粕類●本貫種粕一枚六分●本貫胡麻粕一枚七分●荏粕二枚〇
◎鹽●赤穗三俵七分●大鹽丼に八家三俵八分●本齋六俵一分五厘●新齋七俵〇

雜錄

遺珠顆々

○小見　シドニー、スミス

小見はすぐれし人相見なり、彼等は直ちに眞實の友を發見す

○經驗　ナポレオン

經驗！經驗！何事も經驗なり

○吾家　コレリッヂ

人間の大半は概ね吾家に在て猶異鄕の客たり

鹽辛ひ料理（下）

司馬のや

羽根子（皿を取集めて片付けて）炙肉を持てお出で。―

みつ（皿を片付け出て行く）

海田君、彼の食鹽專賣權に就て、僕の意見を述べれば・・・・

羽根子　鳥渡、鳥渡、只今では政治上や社會經濟上の

御話は、御無用に遊はして、ま一召上りませ、
もし炙肉が參りました。

みつ　炙肉を持來り(水野)の前に置き出て行く
水野　(切り初めしが、切り惡くして困る)
羽根子　おや、少しも切れませんね?
水野　是れは少――
羽根子　何ですと?
水野　堅い樣に思はれる。
羽根子　其樣な事はありません、失禮ですが、貴人は御下手です。どれ此方へ頂戴。
水野　(入物を押やり)どうか何分よろしく。
羽根子　(眞赤になる)まア此小刀は、切れないのですよ、直ぐに研がせに、やりましやう。
みつ　(肉醬と苣菜を持ち來り再び出で行く)
水野　お前額に汗が出たよ、私におかし、最一度やつて見樣。
羽根子　最切れました。炙肉の此香では、能く出來て居ます、如何です貴人召上れ。海田さん、此處に肉醬と苣菜が御座います。
海田　難有存じます。
海田 水野　(喰し互に見合せる)。
羽根子　如何です、お口に合ひませんか?
水野　眞實に云へば――
羽根子　エ、又いけませんか?
水野　どうして、どうして、非常に美味が、柔かさが充分でない樣に思ふ。
羽根子　是は私の罪ではなく、肉屋が良ひ處を、與れなかつたのですよ。
海田　左樣、左樣、肉屋が惡るい。どーも彼奴等は、婦人を苦るしめんが爲め、能く此樣なる惡戲をしますよ。

羽根子　然し堅くつても喰へます。未だ布顛（麥粉或は黍粉に牛乳、鷄卵を混和し製したる食物）を持つて來ますから鳥渡御免遊ばせ、最火から下ろす時分です——、何卒其中に此切つた炙肉を召上つて下さいませ。（出で行く）
海田　君、僕は三十二の健全な齒を有するけれども、此炙肉を喰ふには先づ、擣磨がなければ駄目だ。
水野　實に然り、然り。
海田　苣菜は？
水野　鹽辛ひ。
海田　肉醤は？
水野　やつぱり鹽辛ひ。
海田　夫れ見給へ、食鹽專賣權廢止の恐るべき結果は此處にあるのだ。
水野　妻は一斤の鹽を一度に用ひ盡したのだろう—
海田　然し、炙肉は、どう仕様ねェ、是は到底喰へない。
水野　之を皿の上に殘して置時は妻に氣の毒だから、何か工夫はないか知らん。能し、能し、此卷煙草箱の中に肉を入れて置て、跡で竊に棄て、やらう—（自分と海田の皿より肉をとりて箱の中に投ず）
海田　早く、早く—今日の御馳走は僕は臍の緒を切つて初めてだ。
水野　中に手品もありね。
海田　失敬の言だが、是れで喰へる物がなければ哀ひね。
水野　君は色々云ふて僕を益々怒らせるよ。
海田　君は怒るのか？
水野　云はずと知れて居るではないか？
海田　そんなら、君は喰はぬが宜ひ、怒つた時は食事せぬが天下の通則だ。

羽根子　皆さん御待遠さま、丁度能ひ時臺所へ參りました、布頰は出來懸りて居りました。最少し炙肉は如何です？

海田　難有澤山に戴きました。

羽根子　御遠慮遊ばさず、どーか。

海田　僕は性來布頰が好きですから、其方を澤山戴ける樣腹に空き地を拵らへて置きましよう。(獨語する)今度は能く出來て居るだろう、未だしも希望を繋ぐ微光は是だ。

羽根子　貴人は如何？

水野　僕も海田君と同感だ。

羽根子　(呼鈴を鳴らす)夫れなら出させましやう。

羽根子　持つておいで(侍女出て行く)

羽根子　(ワイン、ソース)は如何？

水野　元來(ソース)とは何故云ふたろう？

羽根子　夫れは又何故に？

水野　其語は元來(ザルサ)と云ふのを佛人が(ソース)と直した、然るに我々は此美麗なる語のあるに態々佛語を用ゆるとは、眞に佛語ではなく不都合だと思ふよ。

みつ　(布頰を持ち來り、羽根子の卓上に置き、再び出で行く)

海田　兎に角、僕は(ソース)に贊成を表す、何だか(ザルサ)と云ふと(サルサ)(鹽の義)に音が通ずる樣だからいやだ。

羽根子　(海田へ布頰を與へて)如何で御座ります？

海田　(獨語す)是れは恐入る。(布頰は全く黒焦となりをり、肉差にて貫き得ぬ)奥さんは急度、ウオーパン式の要塞建築法を御研究になりましたねー

羽根子　何故に？

海田　(小刀を取りて)此外廓の堅固な事と云ふて(外。

皮を剝ぐ)

羽根子　海田さん、お口の悪ひ事ねヱ、貴人。

水野　(布頓を取る)

水野 海田　喰し互に見合せ吹き出す。

羽根子　(ムツトシテ)何事です、皆さん！

海田　奥さん是れは(あは、は、は、は、)

羽根子　譯をお話し遊ばせな。

水野　お前何んだね、(あは、は、は、)怒る事はないではないか。

羽根子　でも、貴人の爲され方があんまりだから。

水野　お前の布頓は外部は焼けても、内部は未ば火が通つて居ないよ。

羽根子　夫れはあんまりですね、其樣な事云ふて。

水野　お前はあんまり火を強くしたからだよ、布頓は軟火に懸けねば行けぬものだ。

羽根子　おや、貴人は料理法を御存じなの？

水野　(笑つて)お前位はねヱ。

羽根子　隨分激烈き御辭です、妾が此樣に骨折て料理しても馬鹿にされるとは無情けない。

水野　怒るなよ！怒るなよ！

羽根子　ほんとに無情ない、殿方は婦人を苦めるものではありませんよ。

水野　(眞面目となりて)其樣な言はおつゝしみ。

羽根子　貴人の方が倘ひどひではありませんか

海田　然し御夫婦―

羽根子　海田さんの居らつしやるのに、云ひ爭ひするなぞ、御免遊ばせ。だが辛棒の度合があります。

(立上る)

水野　(立上り)辛棒なぞと云へば、此方より云ふべきだ。

海田　まアいイさ。

羽根子　辛棒？、とは又何故に。

水野　少なくも、此食事では。

羽根子　おや、食事がどうかして居ましたか？

澤田　（冷靜て白麵包を喰し葡萄酒を飲み居る）

水野　肉湯は鹽辛かつた。

羽根子　あら虚言！

水野　お前でさへ咽哽たではないか？

羽根子　一飲みにしたからですよ。

水野　肉醬は鹽辛く、莒菜も鹽辛く、炙肉は堅く、布頓は喰へない。

羽根子　妾も今日と云ふ今日初めて、殿方は恩知らぬ人達だと云ふ事を覺りました。

水野　恩知らずとか？

羽根子　妾は二時間も臺所にて骨折り、指を傷けたり手を火傷したりしたのに、あんまりです。

水野　お前そんな不慣の事をせずとも、料理店から取寄せればよいに。

羽根子　左樣ですか、貴人は其時になり私は家婦の責任を知らぬとか何とか御叱咤りなさいませんか？

水野　其樣な事云ふものか。

羽根子　いゑ、きつと御云ひなさいます、そも、そも、貴人が惡るい。

水野　それが？

羽根子　何故十五分、御後れなさいました。いくら旨く料理しても、其儘にして置ては惡くなるは當り前です。其樣にして朝早くより、夜晩くまで、婦人を責むれば、責める事は澤山あります、自分の罪は棚に上げて、却て婦人の勞苦を思はぬとは、無情ないではありませんか？

水野　婦人なんぞと云ふ者は、色々の想像を圖ものだ、男子が鹽辛い肉湯を喰ぬとて非道の人に落すのは嚴しひ。

羽根子　肉湯は鹽辛くはありませんよ。

水野　海田君、證人になり給へ、君は冷靜拂て、白麵包を喰して居るな。

海田　若し君が御馳走するのなら、何卒僕の空腹を直して呉れ給ひ。

水野　夫れ御覽、良ひ證人だ。

羽根子　あんまりだ、海田さんにまで、妾の事を惡く云ふて、ヲヽヲヽ（泣き出す）

水野　おや、誰か來た樣だ。

只須　今日は皆さん―、何事が起たのです。

伊奈子　羽根子さん、お泣きだね。（傍へ寄り）

只須　今日參堂したは、此好天氣ゆへ、何處かへ御一所に散歩せんと御誘ひに出たのに、御宅では曇天と見へる。

水野　本の些細の辭爭ひ―御話しする程ではない。

伊奈子　話す程でないと御云ひでも、羽根子さんは泣いて居らつしやる―どうしたのです、見つともない、御話しなさい。

只須　水野さん、君はどうしたのだ？

水野　御話する程ではありません。

羽根子　（すゝり泣き）聞て頂戴！妾を磨折て置て。

只須　水野君、水野君。君はひどひ事をするねヱ。

伊奈子　羽根子さんを泣せてさ。

水野　では御話し致しましやうが、

只須　片言信ずべからず、さあ、さあ。

水野　妻の泣く原因は、鹽辛ひ肉湯なのです。

羽根子　（泣きつゝ）また鹽辛ひ肉湯と云ふてさ。

伊奈子　まあ。

只須　何の事だかさつぱり分らぬ。

水野　ざつとつまめば、突然下婢に暇を出して羽根子が獨りで料理をやらかしたから皆なやりそこなつた次第。

羽根子・皆なやりそこなつたと、まあ、どうしたらよかろう、虚言ばかり。

伊奈子　水野さん、あなたは無理だよ。

水野　無理ではない、僕は何も妻に料理する樣云付けはせぬ、おまけに黒焦の布顛、堅ひ炙肉、塩辛ひ肉湯を賞美せねばならぬとは實に無情ない。

羽根子　ひどひ讒謗だ事。

伊奈子　眞にねエ、殿方はあんまりだよ思ひ遣りなぞは少しもない。

只須　（益々除々に）此處は先づ水野君の言が眞實なるや否調査するが必要だ。何處までも少しかたぐろしい言分だが法律界の軌道は公正なるを以て、嚴正に其責任を盡す積りだ。布顛が眞に焦て肉湯が眞に鹽辛ひかしらん。（食卓の傍へ寄り布顛を試む）

澤田　澤山に召上れ。

羽根子　貴君はまあ御默りなさい。

只須　待て御出で、今能く調らべるから。

伊奈子　貴人は嚴正中立の法官とは云へはい。總して殿方はいつでも食事の悪口を云ふものですから、妾が一番裁判致しましやう。（食卓の傍へ行）

只須　奥さん、布顛はほんとに焦げてゐますよ。

伊奈子　左樣ではありませんよ、少し許りこんがりなつて居るのです。

只須　こんがりと、是は黒焦げで眞の炭だ—布顛を猛火に上せるものだから外が焼けて内が生なのさ。

伊奈子　殿方も料理法に明るひ事—油斷はなりはしません。

只須　それはお前、學生の時分には破綻なぞは自分で縫はねばならぬ事もあつたよ。

伊奈子　左樣ですか？

只須　だから、時には又自分で料理する事もあつて少しは覺へて居るのだ。(棚の傍へ行く) 此處に炙肉がまだある、水野君の云た通り是は堅ひ。
伊奈子　(貴人の跡へ付て行き試む)堅くはありません、是は只柔かさが充分でないのです。
羽根子　試驗なさるのはよして頂戴よ。
只須　柔かさが充分でない?
羽根子　もう何でも宜敷いからおよし遊ばせ。
只須　未だ試驗が終はらぬ—鹽辛ひと云ふ肉湯は何處にあるか?
水野　もしありますまい(呼鈴を鳴らす)
伊奈子　水野さんどうなさるのです?
水野　まあ—待つて居て下さい。

みつ　御用で御座りますか?
水野　もう肉湯の殘りはないか?
みつ　少し許りお鍋に御座りましやう。
水野　夫れを持つておいで。
みつ　(はい出て行く)
只須　充分に判決を下す事が出來るわい、是は面白い。
伊奈子　拜見致しましやう—。
羽根子　御生ですから、もういゝ加減にしておよし下さい。
みつ　(皿に肉湯を少し入れて來り、再び出て行く)
只須　どりや、一寸(嘗めて)を—辛ひ!
伊奈子　(嘗める)いゝゑ、
只須　非常に鹽辛い。
伊奈子　いゝゑ、是れはあたり前より、鹽が一顆だけ多ひのです。
只須　だから鹽辛いのさ。
伊奈子　貴人は分らない方だ。
只須　已れの舌が已に云ふ事は常に間違ては居ない。

伊奈子　男は男連れで、貴人は水野さんを贔負するから困る。

羽根子　左樣です、叔母さん、贔負の引倒しとは此の事でしやう。

伊奈子　婦人を磨折る時は、殿方はいつも一所になるよ。

只須　今日は磨折める譯ではなく、肉湯が鹽辛い鹽辛くないと云ふ次第だから、論題外には渉るべからずだ。

伊奈子　肉湯は鹽辛くありません。

羽根子　實に左樣です。

海田　（出で行く）

只須　そんなら料理人を集めて、此肉湯を試みさせようか。

伊奈子　不足言—こんな、小事件なのに？

水野　先きには妻は泣て騷ぎ立てたのに—

只須　小事件？旨く調理するは大事件だよ、まづく調理の食物は消化に惡く、消化が惡ひは健康に害がある—

伊奈子　何とでも、お云ひ遊ばせ。だが分りました、貴人は婦人を磨折めんとするが目的なのですもの。

海田　（入り來り）只須君の奧さん、ゑらひ事が始りました。

一同　ゑらひ事？

海田　あなたの小犬が。

伊奈子　私のショヲリー？彼は私共と先刻來ましたが。

海田　臺所に參りまして。

伊奈子　（心配して）どうか致しました？

海田　侍女が肉湯の殘りを皿のまゝ地上に置きました處、

伊奈子　シオリーが

海田　嘗めました。

伊奈子　おや、まア。

海田　左樣すると直に斃れて苦んで呻吟つて居ます。

伊奈子　妾の可愛いチオリーが、

羽根子　だつて、叔母さん！

伊奈子　妾はもうお前さんの肩は持たないよ。皆さん御免遊ばせ……犬を見に參りますから。

海田　僕が石鹼水を飲ませましたからもう氣が付きました。直ぐによくなりますよ。

伊奈子　夫れは、有り難く存じます、御蔭樣で。

只須　お前は肉湯を平氣で嘗めて居ながら犬がと聞いて眞赤になつたね。

羽根子　(獨語する)皆さんは妾の敵に御なりなすつた。

(水野の傍へ行き、よりかゝる) もし貴方！

水野　(親切に)お羽根。

一同　(緘默す)

羽根子　妾の拵らへた料理は皆な出來損ひまして申譯も御座りません。今は漸く目が覺めました。

水野　お前猿も木から落ちると云ふはね。

羽根子　夫れで、妾は是れから料理法を學びます心得で御座ります。

一同　御尤、御尤。

春の野邊

(口繪の繪解き)

溫柔なる春の神は遲々たる春日に怨して又もや下界に降りたまへり。彼が輕やかなる羽風の落る所、山は淡紅の袂を懸けて霞の色匂ひ、野は淺緑りの裾を曳き殘して若草の香萌ゆ。梓弓春の彌生はうら〳〵として日影長閑けく、吹く風も袂にぬるむめり。色淺き柳の絲の貫きとめにし曉露の玉は、手を觸れな

ば潰れんと欲するなり。夕風のさゝやきに驚き起ちにし花の二片三片の軟草に凴れるは、採らんとすれば飛ばんと欲するなり。

かの籬近き一叢竹に臥しなれて朝ごとに啼く鶯は、ひとくと止むれども、暫離るゝ小鴉は聲々にいざあと誘ふ。

ア、紅の日のさし出でゝ花影簾に上るや、香を覓めて飛び繞る栩々たる夢魂の罪無さよ。ア、打群れて別れつ會ひつむつるゝと見るや、櫻花の枝打たゝきて風吹き又散々に飛び分るゝ蝴蝶のいたいけさよ。

況や此の自然の妙畫に、點綴して小天使の踏舞するあるをや。可愛の子等は去り去て野邊の蕨を折るなり。可憐の乙女等は行き行て野邊の菫を摘むなり。

＊　＊　＊　＊

春の野は。道ぞ行かれぬ。
右ひだり。すみれ花咲き。
初わらび。生ひまじりけり。
すみれ草。つまんとすれば。
行く先に。雲雀鳴きたち。
初わらび。折らんとすれば。
來しあとに。鶯なきて。
おもしろみ。聞きすてがたみ。
道ぞゆかれぬ。

時事一斑

新議會

新議會召集の令は三月三十日を以て出されたり。曰ふ、『五月十二日を以て帝國議會を東京に召集す』と。而して二十一日を以て會期とせられぬ。

贏？輸？

贏？輸？新議會の黨派別を視に人は左の如しと言り。

政府黨	自由黨及び和歌山派	百二十六名	百四十八名
	井上角五郎末松謙澄氏	七名	
	及び山口出身の議員	七名	
	中立黨中の政府黨	四十名	
反對黨	同志同盟政社	六十名	百四十一名
	改進黨		
	國民協會	三十一名	
	舊大日本協會政務調査所員	十名	

是れ政府黨の豫算する所なれば、自ら其黨を多數視したることあるべけれど、兎に角贏輸はきはどき、所に於て決せらるゝならん乎。

新聞記者同盟

東都の新聞記者三月廿八日會合して、

第一、昨年十二月の衆議院解散を失當と認むる事。
第二、我邦の外國と訂結しつゝある條約の勵行を促す事。
第三、條約改正の急成を期する事。
第四、國民の對外自主的精神を發揮する事。
第五、此の精神に一對する責任内閣の成立を希望する事。

の五條件に付き同盟し、以て藩閥政府に大抗議すべく團結せり。而して其訂盟したるものは、

日本、陸實。 二六新報、鈴木力。 報知新聞、酒井雄三郎。 讀賣新聞、市島謙吉。 毎日新聞、肥塚龍。 國會、末廣重恭。 國民之友、栗原武三太。

日本、三浦鐵次郎。 報知新聞、尾崎行雄。 中央新聞、川崎三郎。 讀賣新聞、加東昌三。 國民新聞、德富猪一郎。 國民新聞、竹越與三郎。 新朝野、川村醇。

伊藤伯の工業立國意見

伊藤伯地方官に、日本の國是を工業立國方針に定むべきを告ぐ。

弱肉强食の競爭場裡に介立して能く一國の獨立を保ち益々開明進步に赴かしむるには其國に於ける富力を增進せしむるを以て最良の武器なりと信ず而して其の富の力を增進せしむるに就きて我國土の形勢、國民の資質如何を顧みれば實に工業を措て他あらざるなり故に今後益々實業教育中工業の教育を奬勵して他日我が日本をして東洋の英國たらしめざるべからず左れば政府は先づ是等實業教育の奬勵發達を謀りて實業教育費國庫補助法案を提出したる等專ら其進步發達を企圖しつゝあれば地方長官に於て十分此意を躰して縣下の實業教育に關しては最も注意奬勵せられんとを望む

識者曰く、『人を以て言を廢つべからず』と。

日本婦人矯風會

日本婦人矯風會は、四月三日東京上二番町の女子學院に其第一回の大會を開けり。役員撰擧報告を卒へ、德富猪一郎氏が今日に對する婦人の責任を論せる演説ありたり。

社會警醒の兆

四月三日より七日までに擧げられたる組合敎會總會の議題中

米國よりムーデー氏を招き全國各所に大運動をなす事
在來の組合諸教會に悉く總會に於て參政の權を與ふる事
組合教會の信仰箇條を今一層精細に爲すこと
宣敎師に對する協同の事業と精神の勵行
傳道會社の傳道師をして十分の運動をなさしむる爲め運動費を支給する事

等の問題あり。亦社會警醒の氣運が驅りたる所に非や。

高等師範學校

高等師範學校は三月二十九日文學科卒業者二十三人及び附屬尋常中學科十四名の卒業式を擧げぬ。

女子高等師範學校

女子高等師範學校は三月廿四日卒業式を擧げたり。卒業者は高等師範學科十六人、小學師範學科七人、附屬高等女學校卒業三十八人。

韓客

韓客金玉均氏上海の客舍に殺さる。而して朴泳孝氏は終に免れたり。

二氏は實に明治十七年に於ける我が對韓政略の犠牲となり。遁れ來りて我に在りたるもの。而て刺客の張本李逸植は三策を畜して我邦に渡來し、朴は其第三策によりて府下麹町の親隣義塾に刺されんとせしが、下手者たるべき權東壽權在壽兄弟怯懦なりし爲に事成らず。遂に李及び權兄弟は謀殺未遂罪を以て、朴及び李圭完、鄭蘭教、金兵國、柳承萬、朴平吉は、擅に李を制縛監禁したるの所以を以て、共に拘留せられたり。

而して金は刺客の一人洪鍾宇の爲に誘はれて上海に去り、終に其第三策に中りて果敢なき最後を遂げぬ。ア、壯志未だ酬ずして身先死す。彼が末路も亦憐むべき夫。

白層々、紅曳々

白層々、紅曳々、東臺墨堤の春、雲の如し。袖翩々、裾翻々、西郊東郊の人霞に似たり。



閑なるが如く、閑ならざるが如き今日此頃、豈『世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし』の情に堪ふべけんや。且つ郊外に去て夕春を望むに、『紅樹青山日欲レ斜。長郊の草色緑無レ涯。遊人不レ管春將レ老。來ニ往庭前一踏ニ落花一』。

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行